

昭和二年一月三十日印刷
昭和二年一月一日發行



曲豆園

月刊 演劇研究

第八月号
第八卷

演劇研究雜誌



春の訪づれ

早くもきざす春のひかり、緋桃白桃咲き匂ふ長閑さは先づ高島屋に訪づれて來ました。春淺き頃の御衣裳嶄新な流行品は各階に満ちみちてまゐりました。花にささかけて先づ暖かい高島屋へ

大 阪



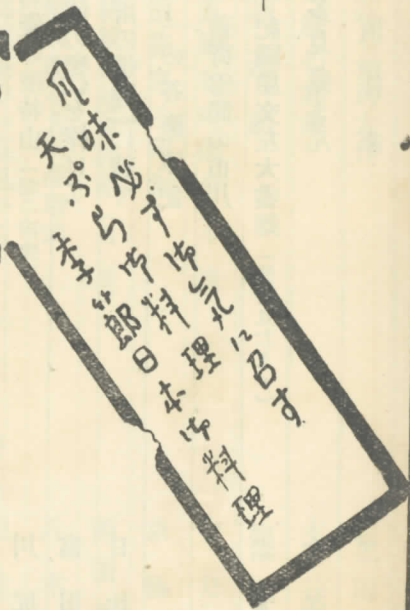
高島屋

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を—



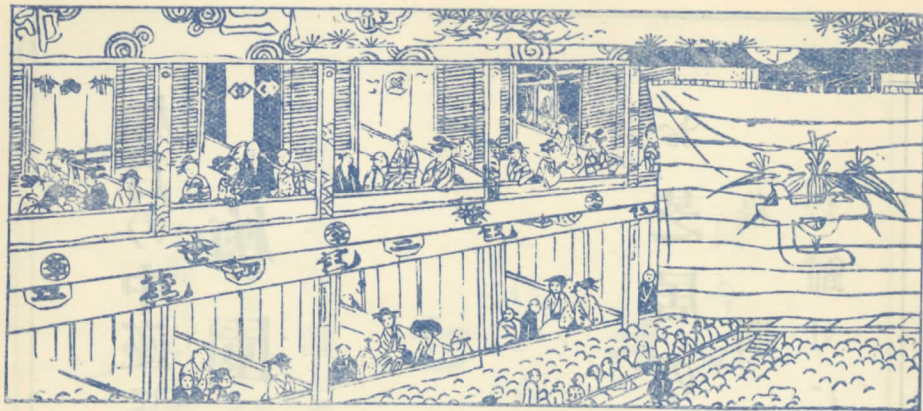
高島屋會食



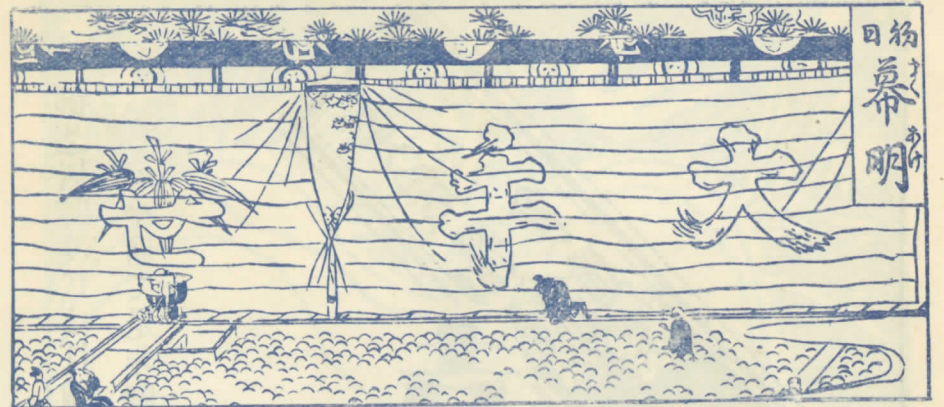
道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋



頓堀 二月號・第六輯



月刊・演劇研究 道

日初
幕明

昭和二月一日發行

表紙・檀特山

豐國筆

口 中座「檀特山」中村鴈治郎の敦盛卿◇中座「檀特山」で熊谷を演る市川中車
 ◇中座「薪荷雪間の市川」澤村宗十郎の山姥◇中座「時雨の炬燵」中村鴈治郎
 の紙屋治兵衛◇中村福助のおさん◇中村魁車の小春◇道頓堀各座初春興行舞臺
 寫真(中座) 梶久末松山(中座) 大晏寺堤(浪花座) 盛綱陣屋(辨天座) 文樂
 人形淨瑠璃の廓文章◇(松竹座) 聚雨(角座) 養蠶の家(松竹座) 水谷八重子の
 眞 鷺娘(角座) 秀千代殺し◇文樂座如月興行「先代萩」に「逆橋」の舞臺面

如月斷片	白井松次郎 二
喜劇の將來	成瀬無極 四
日本特有の樂劇を振興すること	入江來布 六
らく書道頓堀	石割松太郎 二〇
紀文 二題	高原慶三 三三
四代目訥升の話	澤村宗十郎 三〇
故名優の檀特山(型の研究)	川尻清潭 二六
『追憶の甕』を捧げて	富田泰彦 四〇
『時雨の炬燵』に就て	日比繁二 四三
一の谷嫩軍記	三三
薪荷雪間の市川	素木宗一 一五
本臺上演	紀國屋文左大盡舞(芝居見たま)
故多見藏さん	食滿南北 四
劇壇往來	黒衣生 三

内証話し相馬大作

額田六福 三〇

文樂座の印象

木谷蓬吟 四

劇壇漫語

油屋久二 四

各一座一月の印象

中井浩水 五〇

浪花座の印象

京極利行 五三

新派劇漫言評語(角座)

西田眞三郎 五五

辨天座の人形淨瑠璃

八木柳緑 五

辨天座的一幕見から

浪花町人 五

喫煙室

高橋蓼雨 六

「道頓堀」句會

繁二記 七〇

戯曲 妹の土産 一幕

中井泰孝 五九

道頓堀各座如月興行一覽

七三

中座如月興行役割一覽

七三

次號豫告

七

編輯後記

姥谷生七 四

扉挿繪

大塚克三

如月の中座にふさはしい

梅園のお献立……



お芝居の
幕間と
お歸りには

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁目
電話南六二二七番

只今のお召物

ネ ル

これからの御需用

セ ル

坊ちゃん、嬢ちゃん、お年寄りをはじめ小原の粹な
ネルとセルをお召物になつたみなさんのお姿はまた
一段で御入ります

大阪心齋橋筋

小原ネルセル店

ほ、笑の

お姿を……………中座三階の

電光寫真……………にて

印象深き一葉に
あなたの微笑と輝きが溢れてゐます。

とても粹な……………

あなたの趣味にピッタと適つた

芝居好みの
人形玩具

中座賣店の

利久堂



(助之松川市人新るす扮に僧小鼠)

開公日近



鼠小僧

松竹キネマ蒲田スタジオ特作映畫

徳川中世の寵兒鼠小僧に絡まる義理人情の奇しき因果物語を新解釋のもとに映畫化したる蒲田時代映畫の帝王篇……………

中川紫郎	監督	作品
原作	竹柴鶴松	
脚色	佃血秋	
撮影	藤川伊千三	
主演	市川松之助	
助演	松尾鐵太郎	
同	若葉信子	
同	高尾光子	



今春流行の紳士向

新柄ワイシャツ

揃ひました

市内百貨店及洋品店に有り

三ツ星印
元發カラーシャツ

三ツ星商會

大阪市南區横堀七丁目四番地
電話船場長六四三番
振替大阪七一九二二番

本舖が多年苦心を重ねて研究し
茲に完成したるスキナ脂取紙は
既に定評あるもの

化粧用脂取紙は卓越せる
スキナ脂取紙を召せ

皮膚の榮養は勿論お顔の
荒は直ちに治す

御使用すれば心地よくス
キナお顔になる

スキナ脂取紙

發賣元

大阪市東區北久寶寺町二

朝日堂株式會社

製造元

大阪市西區立賣堀北通一

中田庄太郎商店



場の内盤紙『燈籠の雨時』日番二

衛兵治の郎治鴈村中

伎舞歌大回西東の行開月如座中

白玉ソース株式会社

久
隅

な
久

賣
れ
る

皇
天



で東の由特演『記軍嫩谷一』の座中
車中川市る演を谷熊
 (夜日九廿月一)て於に野縣田極



鳥の山特演『記軍嫩谷一』幕 中
盛敦の郎治鷹村中
 伎舞歌大回合西東の行興片如座中



場の内屋紙『燈炬の雨時』目番二

んざおの助福村中

伎舞歌大同合西東の行興月和座中



中選津堂常『川市の間雪荷薪』演理淨

姥山の郎十宗村澤

伎舞歌大同合西東の行興月和座中



幕五『作大馬相』作氏福六田額
 作大馬相の郎二正田澤
 行則月如鹿花涙



壇の各屋部『燧姫の雨時』目番二
 春小の車魁村中
 伎舞歌大同合西東の行則月如座中



面台舞の『雨驟』演上座竹松



角座上演『養蠶の家』

喜多村謙郎の批評



子重八谷水『娘鷺』演上座竹松



角座上演『秀千代殺し』

花柳翠太郎の秀千代
藤村秀夫の宗吉

初春の道頓堀

中座上演『大晏寺場』

中村雁治郎の

春嵐治郎石衛門



幕二『山松末久橋』演上座中

菅兵次最良の座中
夫と山松の助藏村中



浪花座上演

『盛綱陣屋』

實川延幸の盛綱



辨天座の人文築形淨瑠璃

『廓文章』の舞台

尾張名産

八丁味噌
名古屋
産醬油

うまい
泉
リマタ



發賣元

大阪西區南堀江通三丁目
盛田合資會社大阪支店

電話櫻川
三〇九二
番八七七三



文樂人形淨瑠璃
伽羅先代萩之逆櫓
新天座如月興行



キツコーマン醤油

大阪西區江戸堀北通

野田醤油株式會社大阪出張所

の附紙折
は品答贈御

松竹共通觀覽切手

この切手一枚で全國何處へ往つても松竹經營の劇場のお芝居が見られます。

お手頃の額額
一圓・二圓・三圓・五圓
十圓・十五圓・廿圓・五十圓の八種

御觀劇代のほかには御召上り物、各賣店の御買上品、本家茶屋直營の案内所等一切の御支拂に通用致します
様式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は二十錢券五枚にて離れるやうになつてゐますから至極御便利です。

お手近の發賣所

大阪南區久左衛門町八	松竹合名社
大阪道頓堀	(電南二四〇・六八五)
大阪東區高麗橋心齋橋筋	角
京都市河原町蛸薬師上	(電南六九五)
	ブレイガイド
	(電本三三〇九・三九九五)
	松竹合名社
	(電中二三三)

其他各座にては三日前より場席の取れる指定番號入前賣切符も發賣してゐます

銘酒



フクムスメ

神戸市榮町五丁目

花木神戸支店

電話元町(長)一七五七番

大阪市西區立賣堀北通二丁目

花木大阪支店

電話新町(長)二六三七番
三六三六番
五三六九番
八一九五番
〇七五七番

兵庫縣攝津灘西郷町新庄家

醸造元 花木本家商店

電話(長)合三七六三番
御影三二九六番
三一九七番
三〇七三番

東京市神田區連雀町十八番地

花木東京支店

電話神田(長)四六九番
二七六〇番

横濱市花咲町四丁目五

花木横濱出張所

電話長者町(長)四〇六六番
一六六六番
六三〇番

道頭堀



第六輯

二月號

如月断片

白井松次郎

恐れ多くも大正天皇神去りまして世は擧げて諒闇のさばりに閉されて居ます。まして此月は哀惜動哭しても尙且つ止みがたい悲しみを覺ゆる御大喪儀の取行はせらるゝに聞いて、私共は只管恐懼しつゝ天職にいそしんで居ります。

諒闇のさばりの一角には留智夙にすぐれさせ給へる新帝をいたゞく昭和の御代の光りが、燦として今や輝いて居ます。

その昭和劈頭の劇界にのぞんで私共は一大勇躍心を持つて活動せんと欲して居ます。そこで最近私の抱いてる断片的乍らいさゝかの所感を述べたいと存じます。第一にこれは私の感想としてよりも御相談としてこの事を聞いていたゞきませう。

それは一演劇に止まらず、映畫をも含む劇全體に社會的感化の問題であります。よく新聞紙上等で不良の徒の犯罪動機を劇の感化に歸してゐる記事を見受けます。その度に私はいつも心を寒くしてゐる者であります。最近な引例ですが彼の殺人罪に問はれ死刑を執行された南地七藏なる者の懺悔録にその殺人の動因がある芝居を見てから云々書き書いてあつたのを見ました。私は舞臺の殺人事件を見てそれを自己の手段の上を持つて來るさいふ心理的影響を考へざるを得ません。劇の存在は一個の藝術の存在であります。その藝術的目的の爲に選ばれた社會相が果して人間に悪い感化を與へるか否か、一人の犯罪者は自己の内部に潜む「惡」の正體を押し出す方便として、或時或劇場で見た芝居に偶然自己の「犯罪」の一致を見出さうとして、それを見出した場合は、それが主

體で自己の行爲はその影だに云はんばかりに、社會的に自己の罪惡を葬り去らうとする、また無智なる犯罪人にしてはさうして幾分でも他に自己の罪を嫁して救はれ様とするのは無理のないことでもあります。それに反して何か秘密を持つた人が或演劇に刺激されて懺悔した、また亂れた家庭が平和に還つた、精神的に苦しんでゐる人が強い信念を抱く事が出來た、等々の様な事實を聞いてゐます。演劇が絶えず社會的に多大のよい教化を與へてゐるさいふことは誰しも認めて下さること、信じます。然し、これが餘りに必然的に行はれてゐるが故に、反對の偶意的な犯罪人の詭辨程には問題にはならない、或時たつた一つのその詭辨がたゞ演劇の存在に暗い影を與へるさいふことは、餘りに苦ししい事ではないだらうか。「芝居が悪い事を教へる」か「芝居は善い事を教へるか」の二つの問題が出た場合私は即座に善い事を教へるものであると答へたい。悪い事を教へるさいふ一部の頑迷な考へ方は一犯罪人の詭辨を信するものではないでせうか。正しい意味から演劇は善良な教化を與へる使命を持つた直接機關であるのです。これは私が劇壇當事者であるが故の抗議ではなく、劇全體としての汚名を雪いで頂きたい微衷からで、皆様の第一考を煩はし度いと存じます。

當月の劇界は中座の鴈治郎始め關西大歌舞伎に中車、宗十郎一門を合同させた大一座、二月一日初日を出しました。此度は鴈治郎が敦盛の若武者振で、これは明治二十三年京都祇園館で九代目團十郎の熊行に對立して好評を博した當り藝です。それ以後は三十六年振の京都顔見世興行に幸四郎の熊行で、上演したきり大阪ではこれが初演です、それにさうでせう、まだうら若い當年の鴈治郎の面影、今度上演される時の鴈治郎の若さには寸毫の變化もない舞臺姿は！他迄も一世を壓する名優としての技倆以外に私は今度の「檀香山」の敦盛に「年齢」のない藝術の魅力を感じたいと思つて居ます。熊谷は中車、これも九代目直傳で手堅い型を見せてくれるでせう。玉織姫は宗十郎、あの美しい面影は他の二役と共に古今に絶する大舞臺だに信じます。この狂言を一般御投票下さつた皆様に深く感謝いたします。



釜淵 連名 儀万外仁万形
 八名若木加坊
 出羽加多佐屋坊
 若幸三流石又
 若木河石居子
 長巻若石泉也
 刀舟
 外六人ナリ

喜劇の將來

成瀬無極

最近歐米劇壇の特徴の一つとして喜劇の流行を擧げることが出来る。獨逸あたりでは佛蘭西や伊太利の翻譯物が多數を占めてゐるやうだが、新しい作家の中にも喜劇に筆を執るものが多くなつて來た。

喜劇趣味の最も低級で俗悪なものは例の *Evite* を稱するもので、これは米國で盛んな *ニミニ* と同様のものである。喜歌劇風の軽い、然し騒がしい、多くは何かはしい觀せ物で、云はば裸體美人の陳列のやうなものだ。これがジャズと共に世界を風靡してゐるのだから驚く。戦争があつても何でも、現代人は矢張頹廢的傾向を取つて官能主義に墮して行くやうだ。古い歴史を持つてゐる柏林一流の劇場レツシング座あたりでさへも、このルヴェーが堂々上演せられるやうになつた云つて、昨夏來朝したアルトウール・ホリツチャー氏が慨嘆してゐた。新しい作家の書く喜劇は流石にすつと高級なものであるが、シユテルンハイム流の諷刺に新様式の衣裳を着せたやうなものが多いらしい。カムニツツェルの「針」さいふのは、間借人のベッドの中に一本の女の頭髮の針が発見せられた事が戯曲的契機となつて、この若い男は部屋に貸主の二人の娘の中、美しい方を失つて、却て尙僕の娘を押し付けられるさいふ筋だ云ふが、評者の説に依るに、この作は「生きた人間をボンチ化したさいふよりも、寧ろボンチから人間を作り上げたのだ」さいふこじである。かういふ思想遊戯者流の書く喜劇は一見氣が利いて、辛辣としたところがあつて、我々の理知に媚びるものを持つてはゐるが、深く情意に徹するものを有しない。

日本の新しい喜劇の中にもかういふ種類の、器用な、一見垢抜けがしてゐるやうで、實は抜け切らない、何處までも頭腦で絞り出したやうなのが往々見られる。そして、演出者は露西亞、伊太利あたりの新しい傾向からヒントを得て、人形芝居の味に能狂言の味をつき交ぜたやうな様式化を試み、寫實畑のものでも何でも構はず、ビエロ式の「人形」に仕上げ、新所作事云つたものでつち上げようとする。所謂「ボンチの様式化」が最も新しい試みとして行はれる。かういふ企ても決して悪いさいふではないが、それには内容形式との渾然たる融合が必要條件である。そして、それは獨り作者の深い主觀からのみ生れ出づべきものである。作者が演出者の意圖が到る處に見え透くやうなのは、畢竟生命力の稀薄さから來る破綻である。

更に、十八世紀に於ける佛蘭西の *Comedie Larmoyante* 獨逸の *Ruhstruck* の規ひに於てあつた「涙の下で笑はせる」さいふ感傷的な情緒喜劇も、純粹な、健全な喜劇とは云へないが、民衆物としては侮る可らざる勢力を持つてゐる。大阪喜劇の特色と人氣とは其處にある。そして、本能と道義との葛藤に力點を置く限り、歌舞伎劇の重要な効果の一つともなつてゐるのである。實際、この種のものも、皮相な技巧からではなく、純真な創作衝動から生れた場合には、もはや所謂感傷的喜劇ではなくして、有情滑稽の眞髓に觸れた立派な藝術品となるのである。

何となれば、眞の「笑」は「涙」に隣してゐるものであり、愛と同情を前提するものだからである。純粹な喜劇的快感は理知や官能にのみ訴へるものではない。また、頹廢した神經に媚びるやうなものでもない。矢張、純人間性そのものに訴へるものでなくてはならない。悲劇を書くのも喜劇を書くのも敢て態度に違ひはない。たゞ人生の見方が表裏を成してゐるだけである。この點に於ても我々は沙翁に於て偉大なる模範を見出すことが出来る。



新王日

新夕林西声口
ふ石佐ト振太
鳥ふ鳥尼我丈
伊七信河原長
尾子
八八九人申り

日本特有の樂劇を振興すること

入江來布

近頃、昔の芝居の中から現代にも復活し得るやうなものを掘出せよとの要求が先覺者から提唱せられて来たのは誠に喜ばしい事である。芝居が自然主義、寫實主義ばかりでは遂に行き詰ることは敢て今日始めて達着した實驗ではなく、昔から事實が矢張りそれを語つてゐるのであつて、即ち世話物の外に時代もの歌舞伎ものが對立し、時代の歌舞伎ものゝ中にも分科的に純然たる象徴的なものも發達して來てゐる、特に、音楽や舞踊を主とした所作事の特長なる發達は大に注意して見るべきもので、日本の舞臺藝術の獨特なる味はひはこゝにも十分に醸成されて居たのであるが、而も一時何事によらず、寫實に反したものは皆偽りであつて、藝術力の根本たる實性をもつて居ないといふやうな見解にかたづけられ、一方また西洋風の輸入に驅られて全く顧みられなくなつたのみならず、寧ろこれ等のものは芝居の上の邪魔ものゝやうにも扱はれた時であつたのである。

併し、西洋でも一方にのみ偏して満足を得て居るものではない、思想劇や社會劇が旺盛なる一方には、昔ながらの歌劇も愈々勢力を張つて居り、また新しい音楽、新しい舞踊が起り、それ等が結合して新しい歌劇も勃興して、遂には普通の劇の上にもだん／＼非寫實的傾向、非問題劇的傾向が勢ひを増して來て、従つて「芝居を芝居として味はふ」いふ趨勢が濃厚に

なつて來たのである、日本の劇壇でも同じ趨勢をたぎつて創作劇なきも漸次に象徴的となり一方には昔の芝居復活の要求が勢力をもつて來るさいふ時代となつた。劇壇當事者は此の「昔の芝居の復活要求」に對し相當の注意を拂はねばならぬこゝに思ふ、西洋の傾向につれて直にそれを直譯輸入して、あわてゝ日本にも新しい音楽、新しい舞踊を起し、新しい歌劇を創成しやうといふ運動も決して無意義ではないけれども、同時に我國に昔から同じ要求のこゝに存在し發達してゐる所の我國獨特の音樂舞踊劇、或は一種の歌劇樂劇と言つてもよいが、即ち所作事、又は歌舞伎芝居の特殊なものゝ味はひを全然忘れて了つたり棄てゝ了ふやうなこゝがあつては如何にも残念であり、惜しい事である。

芝居は、綜合藝術と自慢するだけに、全くいろ／＼な藝術の結合であるから、またその面も多趣多様である、故に「芝居は斯くあるべきものだ」單一に規準をきめて了ふ譯には行かない。またさうきまつては面白くない。色々の種類のもの、色々の表現方もつたものが併立してよいのである、この意味からも日本の舞臺藝術として獨特の味はひをもつてゐる或る歌舞伎もの、所作事もの（今、假に是等を總稱して日本特有の樂劇といふ）を活用し、それを時勢に順應させつゝ、自然に繼承發育させて行くこゝは決して無意義ではなく、今日、掘出し物要求の聲に徴しても、寧ろこれは時勢に適應するものと言つてよいのである。

そこで、先づ第一に、一般觀衆に、もつゝ廣く、またもつゝ親みをもつて、日本特有の樂劇ものを味はふて貰ふために、これまで在る之等樂劇の内、よいと思ふものを成るだけ盛んに上演することが必要である、樂劇ものは各々むづかしい約束があつて、誰にでも直ぐ演じ得るさいふ譯には行かないが、その代り多くは一幕ものであるから、時間の點に於ても、組合せの點に於ても便利である。從來でも大芝居には大抵所作事が一つ附隨してゐる習慣になつてゐるが、あれをたゞ習慣性のものとして扱はず、もつゝ親しみをもち、もつゝお互に親切に扱つたならば、きつゝそこから今迄冷淡に見て居た場合は異つた別種のいゝ味はひを噛みしめ得るに到るこゝを疑はないのである。

茲に通俗的な一つ二つの例をいふに、たゞは「勸進帳」なきは筋のよく通つたもので、その主想はいかなる見物にもよくわかり、義経を虎口の難から救ふ辨慶の悲痛な忠節には誰しも涙を催させられる。普通の芝居の筋にしても申分のないものがあるが、その上に、樂劇として、大きく、優美に、しかも最後まで緊張をゆるめずに演出を進めて行く、さうして音樂劇がこたわりなく渾融しつくして居て、誠に此種のものゝ代表として申分のないものである。通人側から見るに「勸進帳」はただ市川宗家の專賣ものといふ程度のもので決して皮肉なものではないのであらうが、さういふ通人的の見方でなしに、大衆的の舞臺藝術として、日本の樂劇を代表するものとして見れば矢張りこれ等を押さねばなるまい。これならば西洋樂劇ばかりを見てゐる人にも十分味はひが解るであらうと思ふ、それから「昇」も別の方面の代表として擧げることが出来る。これは「勸進帳」は反對に、始めから段ものとして獨立したものではなく、かたゞ筋には色々複雑な伏線があり、あの木下川堤の一場だけを見たのでは何の事だかわからない、美しい昇り衛門の道行が忽ち助の魂魄、鬮の利鏢に呪はれて凄愴の氣を一變するなき、さういふ筋道だか、見物にはさつぱり解らぬが、而もこの一幕の樂劇的氣分は、すつかりさういふ理智的判断を超越させてしまつて、見物はたゞ恍惚として我を忘れた境地に誘ひ込まれて了ふ、即ち筋を眼中に置かないで、音樂的にまた夢幻的に見物を魅了する味はひをもつ一種の樂劇として最も好個の代表である。此間の京の顔見世に上演された「戻り橋」はこの二つのものゝ中間に行くものであらうか、これ等はいづれも東京系統のものであるが、大阪に發達したる所作事も對境が小さいいふ難點は免れぬけれども又これはこれとして別様の味はひをもつて存在してゐる、大阪樂壇はいろいろの方面でその振興に努むべく誠に多事多端であるが、慥にその一面として大阪特有の所作事を基礎として、そこに所作事の復興、新樂劇發展の途を見出すべきであると思ふ。

大阪特有の所作事樂劇をさう發展させて行くべきか、これは大なる懸案であり、相當の難事であるが、併し、これも先づ第一に埋もれたる昔のものゝ中より掘出しものを抜擢すること、現にあるものゝ中からもよいものは盛んに上演して改良すべき

は改良して行くこと、さうして一方には大阪特有の樂劇を組み立てること、この努力に依つて進めば決して不可能の注文ではないのである。そのためには第一に「地」になるべき音樂をもつ大衆的に、對境を大きくする工夫が肝要である。大阪の所作事はさうしても「地」が小さかつた、今後は地唄の重奏なきを工夫することも思ひ付きである。淨瑠璃の應川も妙である。孰れにしても日本の芝居が日本獨特の樂劇を忘れないと同時に、大阪の芝居は大阪特有の郷土の味はひを發揮するやうに努力せねばならない。地唄(三總稱するもの、繁太夫、半太夫なごを含む)も工夫次第では大に大阪の郷土的樂劇の「地」にして一層發展の可能性がある、この間地唄の演奏をきいた時にも思ふたことであるが「薄雪」であるとか「浪華十二月」(歌詞は次に掲ぐ)なきも所作事として活用すれば面白いものである。

浪華 十二月

萬代もつきせぬ御代や明けの春、先づ元日の壽や、ものもごうれと初禮者、祝ふ萬歳や七草の、すいなすいしる神かけて、祈る誓ひも若戎、寶おさまる御藏前「吉兆の」毎年戎さん、こゝでござりまつさう」慈に子實はせ袋、中に色めく廊駕「ホイカゴ」中に尻目もうわのそら、のぼる如月初午の、太鼓のふし朝霞、馬場に並ぶ奴いか、糸のもつればから傘の、ひいたまきつうひかれつ彼岸會や(合)涅槃のあさはしめやかに、なんまいだぶ、なんまいだ(合)名にこそ高き浪華寺、伶人の舞や簫の音も(合)雲井に近き難祭、さいつおさ(つ)小杯(合)酔ふたまぎれに、もすそ曳かれし沙千の海よ、蛤ならで片思ひ、ちよいと入れ文をました事は内證(合)たけにしらせし卯月の空に、野崎詣りの舟さ岡、ぞめき詣りのはしたなく、巻くや直歌のあしに巻き、幟の旭輝金時の力も見ゆるあやめ太刀、雨の上りに難波のさつき、灸かこつけごどろつくごんの新地の茶屋で(合)ほたるをまほよ燈籠の(二上り合)天神祭サア山崎の涼みの中を押分けて、「京都烏丸本家ひわゆさう」ばかし二輪加のそのあこで(合)もうお疲ひかせわしなや(合)七夕さんの契りは一夜(合)夜這ひ星さへ逃げて行く、空に一筋天の川、渡りおほせて八朔や、指を敷へて松ケ枝の、恨みもはれて明月の(合)澄んだ心で放し鳥、喜ぶ聲も菊月の、のちの祭りの宮神樂(合)濟んで亥の子の巨燵にも評判聞いた顔見世の揃ひ衣裳の華やかさ、民も賑ふ松ケ枝の、咲くや木の花冬籠り、十返りの花ならん、餅搗く音や煤拂ひ、貫き收めや衣配り、言葉も餘る節季候を取り集めたる数々の、豆の囃して大みそかの末幾千代と治めける。



太鼓

大丹平 大ニ
川ニ大ニ 大ニ
搦小エニガ 大ニ
本気 大ニ
儀、大ニ
大ニ 大ニ
外、十二三人あり

らく書道頓堀

石割、松太郎

◇……むかし五代目團十郎、白猿は廢業したり隠居したり又隠居所から出て舞臺へ現れたりした名人であるが、その晩年に向島へ隠居してから、心にもなく引出された時に、或人に樂屋で化粧をしながら、つくづく「お多き顔に我ながら見いりつゝ、この年になるまで紅白粉をつけるなりわいのあさましきを嘆いたことがあるといふが、役者もかうなるさもうだめだ。

◇……舞臺三平素が、カツキリ三頭に浮ぶやうになつては、役者はおしまひだと思ふ、或はカツキリ三區別がたつてゐる「舞臺における己」が更にカツキリ三、自分に映じてゐる場合は、そんな藝境があつたらばいゝかも知れぬが、大抵の人ならば舞臺も平素もカツキリ三しないのが、役者の身上かも知れぬ。

ると思ふ。

◇……それよりも女形の舞臺が、「女形の女ぶり」が、その妻女に似てゐる例が案外に多いことは争へぬ、畫家が描く――わけて浮世繪家が描く女が、その愛する者に似てゐるのは固よりだが、役者の方にも同じことである、近い例が錦木清方氏の女が、その妻女照子さんにそっくりだ、清方氏の畫く折の女が特にさうだが、近來舞臺でみる大阪の福助の女姿がその妻女――元の鶴羽にそっくりだ。

◇……新派の方では、花柳の姿が、ものいふ癖までが、元の里壽に生寫しださ、つくづく思ふが、誰しもさうは思つてゐないのかしらん。

◇……所が、白猿團十郎のころから、こんなことを思ひ出したのは、實は中座の鴈治郎の敦盛を想像してこんなことを書いたのだ、俳優の舞臺の心境といふものを、思ふがまゝ、そのまゝに傳へられるものならば面白い心持があると思ふ、この敦盛を見ながらつくづく思ふのだ。

◇……ところで、久しぶりの宗十郎が「山姥」を持つて來るので、常盤津松尾大夫が來た、松尾の道頓堀出演は實に久しぶりものだ、いつか幸四郎が「關扉」を中座に演じたときになくてならぬ松尾大夫が病氣のために姿を見せなかつた。

◇……潮川菊之丞であつたと思ふが、決して自分の女房に觀劇を許さなかつたさうだ、立派な男が、紅白粉に身をやつして、女の媚態を舞臺で演ずる己がすがたを女房に見するに忍びなかつたのだといふが、近き頃の去る俳優も、家族の觀劇を禁じてゐた人がある。

◇……が、或はこれは初めから役者氣質の――役者の素質の少い俳優であつたかも知れぬ、特に女形において、家族に見られることを好まない俳優の二三の例を見るが、この俳優たちは、或は常識が發達してゐたといふやうなことが關係してゐるのかも知れぬ。

◇……さ、いふに俳優は阿呆のやうに聞ゆるが、世間的には阿呆な俳優の方が、藝道にかけて秀いでゐる例が多い、近い例があつた九代目團十郎を、舞臺を離れて考へてみる三分のためにさすがの幸四郎の關兵衛が、眼のない佛像のやうなもの、氣の抜けたビールを飲まされるやうだつた。

◇……今度は、宗十郎の「山姥」に松尾の來たころは、我々常盤津好きにまつては、實に久しぶりで、常盤津らしい常盤津が聴けるわけだ、長唄もさうだ、清元もさうだが、わけて常盤津なるさ、その第一人者である松尾を除いて太夫らしい太夫が只の一人もないのだから心細い。

◇……清元ださあれだけの家元の延壽太夫だが、まだ喜久太夫がある、「神田祭」や「明烏」になるさ、喜久太夫は喜久太夫としての聴かしどころもあり、喜久太夫の個性もある、長唄は各人各様、それ／＼の人があつたが、全くないさ、常盤津はさ心細い俗曲は又さあるまい、それで常盤津には秀でた所作が多く大物の所作といふさ常盤津地である、この點からいつても常盤津の太夫養成は急務中の急務ぢやあるまいか。

◇……松尾を除いて誰があるか、家元の文字太夫は、あんな拙い太夫だそれでもまだ文字太夫はあのせりふでやゝいきをついでゐるが、外に太夫らしい太夫がないのだから、やり切れない、飛はなれた松尾太夫この人のために餐を加へてます／＼所作のためにあの聲量を落ちぬやうにしてもらひたい

菅に松尾個人のためのみならず、我が常盤津地の所作のためだ。

◇……例へば松尾百年の後にもうあれだけの「關扉」は東西の舞臺に見られようとは思へぬ、こ、思ふに帝劇の先専務の西野恵之助氏はえらかつた、松尾をその専屬にしてしまつてゐることは、帝劇の何よりの強味だ。

◇……かう考へて見るに、二月の道頓堀を引くるめて、或は松尾の「山姥」が最上至高の藝であるかも知れぬ。——音曲の司である淨りりの二月はさうあらうか、これは各自の大夫の出来榮を聴かないと線斷を許さない、その最高のものこそ松尾の「山姥」に、さうあらうか、私の二月の興味はこゝにある。

◇……今一つ二月の聴きものとしては、朝太夫松太郎の「阿古屋」がある、あの松太郎の三味線を、ほんこに聴いてきんなものだらうか、一月の狂言が「湊町」だつたが、今度の「阿古屋」では、眞の松太郎の技倆を聴くことが出来る、松太郎の嚴正なる批評に少しも接しなかつたが、第二次のこの「阿古屋」こそ老たる松太郎の技倆の見せどころ、又觀客にこつては聴きどころだ、これも二月の道頓堀の興味の一つであるこゝを失はぬ。

◇中座如月興行役割一覽◇

無官大夫致盛、紙屋治兵衛(鶴治郎)妻お染元三浦屋几帳、女房おさん(福助)山橋斧藏實は三田の仕雷、奴高平(右國治)怪童丸後に坂田公時、裸男蝶作(長三郎)武藏坊拜慶(政治郎)奴泰平(成笑)手代重助(成三郎)若者吉藏(高雀)奴福平(雀)奴光平(扇)鯨(鷹之助)奴声平(青鷹)奴玉平(市郎)緞子大盡實は貝賀三兵衛、紀の國屋小春、座頭桂の市(魁車)遠見の敦盛、娘おすえ(章景)白子屋庄三郎(鯉十郎)堤軍次奴鶴平(松鶴)奴萬平(右若)奴實平(福万壽)藝者市松(市昇)手代喜次郎(右左治)若者安藏(右文治)手代藤七(卯十郎)五貫屋善六(齋五郎)(察番龜七)平山武者所、江戸屋太兵衛(箱登羅)粉屋孫右衛門(市藏)熊谷次郎直實、男五左衛門(中車)娘お種元新造誰ヶ袖、丁兒三五郎、鷹匠好之丞(扇雀)土手の甚兵衛(大吉)船頭三次、女房お常(當之助)下女お杉(小主水)手代貞七(八十郎)奴宅平(宇十郎)番頭佐助(金五郎)飯袋權助(連舍)娘お熊藤娘(源平改め訥升)奴角内、鬼念佛(高助)紀國屋文左衛門、玉織姫、百麗山姥、吃又平(宗十郎)



紀文二題

高原慶 三二

俳人千山

蘭の雨あかつき傘のわかれかな 千山

祇園の新橋「大友」の坐敷にあつた横物、主人の磯田多佳女が「紀文の句さすえ」をいって見せてもらつたのを、手帳に書き留めておいた。

二代目紀文、千山に號して其角に師事した、零落後の三代目紀文は龜成に師事して龜山に號した。

「蘭の雨」の一句いかにもスツキリミして江戸前の妙味をたたえてゐる。こいつて、これ一句をもつて俳人千山を餘りに高く買ひかぶつてはいけぬ。紀文の面目は飽まで大盡に終始したところ、いゝちがある。俳句もほんのねむけさましの戯れ事、されば俳人を遇する道にも依然たる御大盡の人もなけなる一面があつた。「吉原雑話」の中に、

祇徳話に、玉匣山人祇空は隠者なり、紀文が言ひけるは何卒予が家の近くへ庵を移し給はゞ三百金をまゐらすべしと言ひしが従はずして義絶せしとあり。

紀文大盡甚だ面目を失した一面である。又、ある時紀文が吉原の茶屋で短冊をせがまれた時、たゞひ酔興さはいへ、

このところ小便無用
こ、なぐり書きしたのを、其角がつゞけて『花の山』に後をつゞけたといふ。

大盡舞

紀文を語ればまづ大盡舞に考へ及ぶ。大盡舞を語る上には山東京傳の『大盡舞考證』に及ばねばならぬ。

「そも〜お客の初りは高麗もろこしは存ぜねど、今日の本にかくれなき、紀の國文左でとゞめたり、緞子大盡は

り合ひに三浦の几帳を身うけする。緞子三本紅絹五疋、綿の代まで相そへて揚屋半四に贈らるゝ二枚五兩の小脇差、今に半四が寶物ハアホ、大盡舞を見さいなア

ところが、手柄岡持の「後はむかし物語」をのぞくこ、几帳といひし傾城は、紀伊の國屋文左衛門に請出されたる女郎にてもやありけん、この几帳に馴染たる士はこの隠居が覺えたる男と聞しが名は忘れたり、几帳紀文に請出されて力を落せしを世の人半太夫節に作りて語りたりとて、隠居も語りき、過し年青樓にも五町（天明の頃吉原にて有名なる幫間）もその淨瑠璃をうなりたりあまねく傳はりしと見えたり

「舟の着いたにサア起されふつゝりばつたり寝入られぬ、寝られぬまゝにつくぐ」と宿の首尾のみ案ずれば、我黒髪は白髪となり、樂みつきて悲みの、なみだ袂をうるほせり、几帳にだまされて、二枚五兩の小脇差、緞子三本紅絹五疋、綿の代まで取揃え、霜月半に贈りしに、終にそれとも見せもせず今は文左が寶もの

い、いつてゐる。

二つの歌意によるこ、大盡舞ではハツキリこ、紀文と張り合つたのを緞子三指名してあるが「後はむかし物語」ではある土として、名も忘れたこ一介無名の土になつてゐる。又大盡舞では「緞子三本紅絹五疋」を紀文が揚屋半四郎に與へた

身代金といふ風に見えるが、半太夫節ではこの無名の土が几帳に與へて、それが今は紀文の寶物さまで轉與されたやうになつてゐる。

ふられた土の心中は頗る同情に堪えぬのにひきかへて、女郎に與へた「緞子三本紅絹五疋」を、自家の寶物にするなんて、紀文も男の風上にもおけぬ人間になつてゐる。

この「緞子三本紅絹五疋」はあくまで几帳といふ名に終始してゐる事は天保十六年版の「松の葉」の中の吾妻淨瑠璃中のきてうに見て明かである。

「見付箱崎舟の中、寝られぬまゝにつくぐ」と室の首尾のみ案ずれば我黒髪も白髪となり、几帳にはだまされるゝ二枚五兩の小脇差、緞子三本紅絹五疋綿の代まで相添えて霜月半ばにおくれども、遂にそれと見せもせず、今は二人が中にある。

いたづらに考古癖にさらはれて詮索するわけではないが、この三つの歌意によつて案ずるに、几帳といふ名も「緞子三本紅絹五疋」はいつでもつき物になつてゐる。大盡舞の緞子大盡も或は、緞子に因むだ架空の人物とも見られる、又紀文が二枚五兩の小脇差緞子三本紅絹五疋を几帳身代に揚屋半四郎に送つた事も甚だもつて怪しげな事となつてくる。そこで大盡舞の歌意がぐらつかざるを得ないのである。

芝居見たまゝ

一番目 紀國文左大盡舞 三幕

素木宗一

序幕 紀の國屋寮の場——は二代目紀之國屋文左衛門の假住居の、豪華な痕は仄くもの、怪しい舞臺道具で幕が明く、

このみぢめな邸も今日を限りに立退かねばならぬ文左衛門（宗十郎）の身のの上である、召使の一同を寄せて別れの言葉告げる、「別れさなれば悲しいが世の成行は是非がない」言ふ。寮番の龜七は、あまりの御不運さ、思はず貴ひ泣きをしてしまつたが「はあて、二代目の文左衛門、百萬兩の番人に産付けられた覚えはない……」見得を切つて、大きく笑つて見せるが、人に知れない肚の底の切

なさは、その笑ひにわびしくも滲つてる。そして、一人になるこ過ぎこし方を思ひまはして、文左衛門にも無量の思ひがこみ上げる。

妻のお染（福助）——元は三浦屋の几帳大夫が座敷へ出て、家を空けるこも床の間に掛軸の一幅、掛けて置くが買主への禮儀さ、お染にはその傍へ花を活けさせる。道に落魄しても彼にはこの意氣が失はれてゐない。

「おもへば床の一軸も、前後二人の持主に、いづれか縁の濃き薄き、黒繪の筆の

置土産……」

たゞ一軸、今の今まで取残しておいた一蝶の掛物、床に掛けて文左衛門はホロリこならず居らない。かうして文左は一足先にこの家の名残を惜みつゝ、惜みつゝ退場する。

こ、几帳大夫ひこりが花瓶の前で花を挿してゐるこ、白子屋庄三郎が来て、その身は且ては紀文の家で奉公をさせて貰つた恩もあるのに几帳を捉へて、罪科もない華魁にまで紀文の貧乏暮しのつきあひさせるは、正直すぎた話。「引取る相手は探さずこも、望むお方がそこらに……」

「え、聞く耳もたぬ……」
ツイこ押へられた裾振拂つて奥へ去る
「コリヤ、庄三郎」
呆然と跡見送る庄三郎の肩を扇子で叩くのが貝賀三郎兵衛（魁車）こてこの家を買取る土、まして、そのかみ、紀文

ミ几帳大夫を競合つた緞子大盡がこの男であるからには、さうやら、庄三郎の動くのにも、黒い蔭の糸があるらしい。返し——になるミ、「同じく裏庭棧橋の場」になる。隅田川にも矢張り悲しみの水音が聞えるやうな……。

船頭三次が舟を出さうとしたら、奴の角内が飛出して殿様の仰せつげだから「その船待つた！」と来る。殿様は三郎兵衛だ。庄三郎を伴れて應揚面に構へて現れる。この邸をわが名を包んで買取つたのも、紀文への面當しである。「人われに辛ければ、我また人につらし」……ミ、儒教の金言を逆用して、「これも叶はぬ戀の意趣！」である。さうも、二千石の旗本分際で薄ッぺらな奴だな、ミ輕蔑したくなる。船頭は無體に停められて氣を短くしちまつてる「エイ、笠棒奴、いつまでもコケのやうに待つてゐられるもンけえ！」と来た。

「もし、船頭さん宮を明けてお呉んなし」ミ婀娜つほい聲、香を燻らしてゐるその煙の一條、二條——ゆら、ゆら、ミ登るミ、その中に几帳大夫の艶やかな顔！「緞子さん——お久し振でありんす」

いかに戀の意趣ある仲さはいへ、名前を包んで寮を買取り、後日になつて、それを悟らせ紀文を悔しがらせる積りとはあんまり男らしゆうもない所作ミ語り、ついでに庄三郎にも一本、痛い釘を打ち込む。几帳大夫の張ミ意氣地、紀文もろこも零落してもその心には變りがない。庄三郎すつかりヘドモドして、文句に詰つてしまつてゐる。散々、二人は太夫にヤツつけられる。奴が傍で黙つてゐられず「しぶさい女め！コリヤモウいつそ」ミ、何處までも三枚目を遁れるここの能きない役ミ、だ。怪しげな刀の柄に手をかけ力むミ、

「奴さん、野暮でござんすよ」

これも、一ミ溜りもなく婉然たる一笑に吹飛ばされてしまふ。

「船頭さん、遣つてお呉んなし」

佃様の早めいた合方で、三次は棹をさす。几帳大夫の一人舞臺でこの幕はもの美事に喰はれてしまつた。

二幕目は「本材木町白子屋の場」

この頃では三郎兵衛、殆ど毎日のやうに此の白子屋庄三郎の家へ入浸つてゐる。表面は碁相手ミ言ふ事になつてゐるが、奥座敷へ廻れば、さうだか知れたものでない。この家で召使をしてゐるお種（扇雀）が、今日も今日まで、奴の角内の眼で、はしなくも昔は三浦屋で几帳大夫の新造だつた誦袖である事が知れる。誦袖は几帳が身請される時、同じく紀文の手で引かされて里へ歸されたのであつた。そして堅氣奉公の爲にきて、何も知らず此の家へ近頃始めて住込んだ等の事が知れる。その旦那ミ言ふのが、以前は紀

文の番頭で、肚の黒い方であるミ聞いては此處には長く居られまいミ、思案に暮てる處へ、このお種の父親が會ひに来る。父親は馬方で、土手の甚兵衛（大吉）だ。この二人の科白に、深川八幡一の烏居に見る影もない住居の紀文様、この頃のみすほらしさは、几帳の世帯連れに重なる氣苦勞で永の病みわすらひ、その日の藥代にも行詰つてゐる事が知れてくる。だから親娘は御恩を返すときはかうした場合にこそ、ミ氣ばかり苛つがさて儘にならぬ金の才覺に、情ない身の上を啣つばかりである。

鐘が鳴る——……、元來、芝居の本釣ほぎシンシリミ響く音は外になさうだ。花道から乞食のやうな男が、この陰に罩る鐘の音に、誘ひ出されるやうに、釣り出されるやうに現れる。小女郎手の編笠に、思案に案じ果てた顔を包んでゐる

が紀之國屋文左衛門の世の哀れをこぼめた姿なのである。

庄三郎へ心ならずも無心に訪ねに来たのだが、さて敷居も跨ぎ兼ね、門口でウロウロしてゐる所を、怪しの者ミ店の若衆に睨まれ危く打擲されかゝるのを土手の甚兵衛が跳り出したので遁れたものゝさて庄三郎が會ふか會はぬかが問題である。甚兵衛は紀文が庄三郎に會ひに来た心を知つて、相談相手になるやうな相手は男でないゆえに、愁ひの事言ひ出すだけ唇寒し秋の風——ミこのまゝ歸さうミ賺して、紀文もまた歸りかけやうミしてゐるミ、暖簾口から庄三郎がいこも叮嚀に迎ひに出たのである——さうも「たゞ」では納まらぬ氣振……を見せて道具が廻るミ「同、奥座敷酒宴の場」になるのである。土手の道芝、夜露に鳴いて……娘のお熊が翳す銀扇が、燭臺の灯に鮮かに光つて、褥に凭る文左衛門も少

しは人心地である。さうした響應を盡し歡が長けてくるミ漸く來意を思ひ切つて打開けて見た。庄三郎は僅のあひだに湯水に流した百萬兩で何が身に付いたミ聞かれるミ、さて、恥しい……俳諧、小唄、それに酒が強くなつた位でないか！用立はしましよ、こゝに千兩！ミ箱一つをすつしりミ膝の前へ突やられた時、流石に人の情が身に沁みたるやうな氣がしたが、改心の印に几帳ミ別れて呉れミ意見されるミ、「やつぱり、さうであつたのか！」ミ庄三郎の肚が見透かされるやうで腹立たしい。よし千兩が大金でも几帳の爲に使へぬ金ミあらば、石ぢや、瓦ぢや用はない、ミ口惜し涙が流れる。百萬兩で傾城の誠を買つたのは大きな商買、その頃、俺ミ競合つた不粹者の大盡や、お前方には分らぬ事ミ、思はず詰寄るミその不粹者の三郎兵衛が立ちはだかる。文左衛門は總てがこの三郎兵衛の差金で

ある事を知つて居た。二人の意外な對面は、漸くにして何事か持ち起しさに殺氣立つてくる。其處へおたねが走つて出て、妙見様のお守ゆえ、これを几帳に差上げて握らせたのが金包み！紀文正しく此處で人の情のいんじつツて奴を真正面から紙めさ、れた譯になる。嬉しい、涙が零れる。今まで理で詰つて涙を返つて居た酒も氣が緩んでか一時にカツミならざるを得ない。「義理の情の福運を、身に授かつた喜びに踊つて歸る大盡舞」三颯ツ！白扇をひらく。これから三郎兵衛、奴の角内三人のからみになつて文左衛門が踊り抜くのだが、その舞臺面を絢爛を如實に描寫するだけのタツチの持つ拙者ならば、「見たま、なんか書いてるないであらう」を肩けてしまふ。残念ながら此の件は、「百聞一見にしかず」の下に隠れさせて置く。

大詰は「深川の佗住居」の場。

置が出たので、几帳は驚いて立歸る文左衛門に狼狽してこれを押し着ける。文句には再び苦界に身を沈めるこの走りがきに、誰袖の容子をこゝで、すつかり察した文左は、おたねを呼び止めに戸外へ走るのである。しかも、その跡で驚きの餘りか、氣を病み抜いたか几帳は遂に血を吐いて椽端に倒れてしまつたのである。ツナギ幕で直ぐ返す愈々「吉原日本堤の場」だ。

「おい、袖乞の非人までに氣の毒がらるる身になつたか」紀文はアザ嗤つてゾロゾロ立去つて行く非人の群を見送つて、思はず後へよろめく、はすみを喰つて、卒塔婆の上に、トンミ腰を下す、……月が出る、遠くに聞える騒ぎ唄の三味線！お、彼處が吉原。

「さつても美事な、それはおつら馬やの小室節、鈴が鳴る、鈴が鳴る……」

「コレ、甚兵衛さの御座らぬか」やつみの思ひでおたねの父親を捉へた。書

この場へおたねが見舞に来て、龜七から几帳の病が世の常でない事を聞く。おたねは再び誰袖の昔へ返り、金子調達の爲にふたゝび三浦屋へ賣られて行く身體！それを茲では隠してゐるのである。几帳も黙つて寝てゐられず誰袖に介抱されて起上るもの、背に掛ける搔卷さへも見當らない有様。

「それさへミうに賣拂ひ、不自由勝ちな佗住居」

「そんならばアノ」ミ言葉が續かない佗住居だ。「あの搔卷まで」

「誰袖さん、お察しなんし」

「顔を背けて、ひこしづく……」

二人の顔がチヨボで漸く濕つて許！それでも古葛籠に昔の榮華をしのぶ部屋着が一枚、「おもふこゝ、なげ節はたれ、月見船」ミ其角が贊の散し書にも、心は涙に散つてゆく。

「そのお姿を見るときは、やつぱり以前

置で委細の容子を始めて知つたのだが、誰袖の身の代を受取つたでは文左、義理詰めにでもしたやうで悪い。「それで彼金のこゝまでお前を探して態々返しに來ましたのぢや」甚兵衛は仲々それを黙つて受取るやうな男でないから、押問答が果しもなく續く。紀文も命がけのやうに熱心に言葉を囁むので「さほさままで、お諦めて御座りますか！」

「馬に乗つてる客がワツ！泣崩れた。や！や！……それは女の聲でないかそして、賣られて行く娘お種が男装してゐたのであつたさは！」

「几帳華魁のお命が、無いものぞ知れてあるなら、なほさら御介抱を遊ばして、御臨終の際までも力限りのお手當が御夫婦の御情合、また御恩を受けた者の身の勤めで御座りまする」

「それほさまでに言はしやるなら、几帳の心は知らぬさ、文左衛門が一存で、この金子を受取りませう！」斯うして紀

の太夫さん、わたしも聽て吉原へ」

「えい？」

「また——二人の顔が思入りで、キマる二人さも口には出さぬが互に別れを惜むらしい。ミミにも引寄せ抱き占めて、おもひの海に風騒ぐ——のチヨボは、この邊、愁歎模様よろしく打して行く。その涙の中からおたねは、「トンミ今まで忘れて居たお見舞のこの菓子折……」

「辱ないお見舞まで、今にも旦那さまが戻つたなら、お目にかけるでござんせう」

「そのお言葉で親娘の義理も」

「え？」

おたねの詞の節々に不審な數々が泛んでくる。が、几帳はいつまでも引止めて居られない。別れて門へ泣き乍ら出るおたね、外に待つ親爺の甚兵衛に連れられて何處かへ去る。

菓子折さ思つた箱からは百兩の金ミ書

文は、千萬兩の金を物の數さ思はぬ身で百兩ミ言ふ情の涙を流したのである。

「綿頭にも散らす其の金を、今は頂くおいさしき……」泣いて押戴いてゐる文左の哀れな姿を見て、お種も胸がせぐり来る。

「あいや、小判は百枚でも、義理のこもつた皮財布……」懐に心ならずも押入れて、「この懐が重たう御座る」

金は漸く思ひで紀文が納めるこゝにしながら、娘を賣りに行く親、賣られ行く娘、悲しみは日本堤の長ささ、いつまでも盡きない。三人がこのまゝに別れもあへず悲歎に沈んでゐるさ、龜七が堤を周章狼狽して驅けて出た。「御新造さまがたつた今、お亡くなりで……」

文左は涙を拭うて今は用ない百兩をハタミ大地に置いて三浦屋へ返して來いミ言つた。ミ、三郎兵衛が物影から沈みがちに現れて、几帳太夫の死ミ共に戀無常を悟る、後は金撒で——幕さなる。

四代目 訥升に就て

澤村宗十郎談

今度は久しぶりで大阪へ参るのですが、今度は末の悴源平が四代目訥升と襲名いたしましたして初めてのお目見得ですから、其事に就て少しお話ししたいと思ひます。

私の若い頃の大阪は役者として一度は必ず修行の爲めに、道頓堀へ出ねば役者になれないと申しました位で、私も三年ほど御やつかいになつて居りました丁度十九歳の時でした。やはり中座に於て、源平から訥升と襲名しましたので、其時は今の仁左衛門や延若さん故人の玉七さんなきこ一座でした。珍しい×

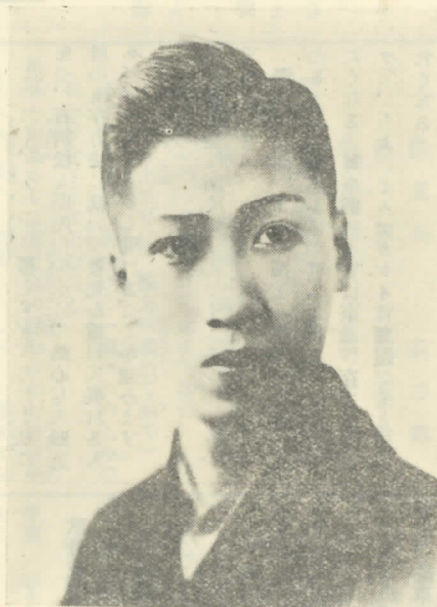


澤村宗十郎

さん久松が其頃の福次郎さんのちの玉七さん、それで不思議な事は今度も同じ二月に八千代座でこの野崎が出るこいふのも妙な因縁だと思ひます。しかも四代目もやはり源平から訥升になりましたのが十九歳で、其上中座におきまし

て襲名の御披露に申上げるのもいよく因縁が深いと存じます。しかも悴は藤娘の役、私が啞娘、何んだか其處にも糸がつながつてゐるやうに思はれます。

何にしても、今度は一番目に右田さんが私の爲めに書卸して下さつた「紀の國文左大盡舞」それに出つゝばりで、中幕には玉織姫、常盤津の「山門」それからまだ切の大津繪に吃又半と習負ひ切れぬ程何とウソミ持たされたわけです。久しぶりであり、かうした因縁の深い中座ですから、ウソミ奮勵いたします考へでゐるます。悴は私の末子で、明治四十一年一月の生れでございます。初舞臺はたしか七歳の折だと思ひます。さき源平を名乗つて、帝劇で益田太郎冠者さんの「女房の心得」といふ喜劇に魚屋の悴を演りました。×



四代目訥升襲名す源平

劇で「扇屋熊谷」の敦盛に扮して四代目訥升の襲名披露を致しました。今度の中座では一番目「紀の國文左大盡舞」では娘のお熊さき程申上げました大切「大津繪」の藤娘の二役でございます。

併も當地では初演でありますので、特に今度は口上幕を設けさせて貰ひまして、鴈治郎さんに、當地での御引立を願ふ口上をして頂き、私も皆さまに御挨拶を申上げるこゝになつてゐます切に御最負の程をお希ひ申上げます。



黒衣生

人間ッてえしるものは、何ミ言つても氣儘な性根に、金輪際、でけ上つてゐるものらしいです。

見るな！と停められると、トテも見たい辯に、いつでも見られるッて安心があるよ、まあ、いや……な案配式に見なくても済む此奴が不可ない。だが、だつて——である。

これが人間の性根だから、どうもねえ……

その譬へが、文楽座の人形浄瑠璃です。御霊に在つた頃は、他所の都に、否、世界に自慢を並べても恥しくない郷土藝術なのである！と知りつゝ、い面倒がつて見そびれて、東京人から話しかけられて、ロクな返辭ができなく詰つてしまふアザマさだつたんです。

不幸中の幸——まつたく、幸にも道頓堀の舞臺に懸ることになつたのは、ちゆうぶん、豊竹、竹本の、その上の全盛をしのびながら傳統の匂ひを味はへる。ロマン、ローランのラアル、ボビュレルの提唱を、いゝ氣もちに實行ができたんですからなあ……

まつたく、うっかり暮しすぎてゐた！私は先づ、石割松太郎氏のやうに、熱心な人形芝居の保存方法に就いて考究を重ねて呉れる人々が、一人でも多く現れることを望みます。

× 劍劇全盛は漸く熄まんとしてゐるンぢやないでせうか？

澤田正二郎が十三年振で「復活」を演つてゐる。これを思ふにつけても櫻丸——と言ひたくなる。舞臺劇の本質は奈邊に存するや？ツて、ちよいとムツカシイ言葉遣ひもして見たくなる。

眞實の物は、何時まで経つてもその質を變動しない。本結城の色艶です。線香花火の華手やかさも、一寸見には、そりやあ、なるほど、しやれたものかも知れないが、どうもねえ——「酒屋の段」の文句を唸られば幕が降りないッて次第に相成りますと、私のやうな

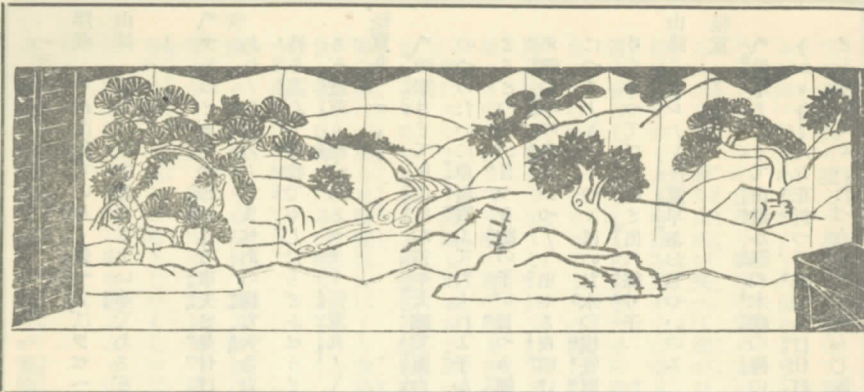
古臭い考へに、二六中、コピリついでるしゆるの人間には……笑殺をしたくなるのも人情。

「眞理は眞理のための眞理也」言へば、光秀枯槁の旗上げのやうなセリフだが、なんごそんな所ぢやないでせうか？どうもツライ。

× 歌舞伎芝居の生命ッてこゝを、よく考へて見る事がある。

小山内薫氏が仰言るに、「歌舞伎劇は既に滅びて、その殘骸のみが存在してゐるのだ！」てな工合に、そこは學者のコトだからコッヒドク論斷されてしまふけれど、私はさうは言はさない……つもりである。

十九世紀末に降誕した所の、若衆達にだつて、そこは光ある處に影ある如く、やにメカニズムな科學文化に心酔しちまふ手合と、一枚刷の繪草紙に憶れる有望な連中と、即ち二派に分離するであらう。



中座如月興行上演臺本

浄瑠璃 薪荷雪間の市川一箭

足柄山の場

怪童丸 長三郎
斧藏 右團治
山姥 宗十郎

造物本舞臺平舞臺杉の立樹の向ふ足柄山の體。

四面鏡々たる足柄山麓に通木樵が本殿に染る葛かつら君命受けてますら男が

(右の上るりにて樵夫斧藏出て来て)

まげたるひちの高枕げに一瓢のたのしみのれふりをさます山おろし

斧藏 山高うして雲行客の跡をうづむ君命受けて此日頃かく山賊ささまをかへ深山幽谷きらいなく行なり次第の氣儘酒れむたさましに、ごりや一盃やるべいか
酒をかつたに盃にげば、うつろふ星の影
斧 ア、うあやしゃナア客星爰にたんたは

なし我が盃中に影さすは扱は一定人傑の此山中に有りさいふ天の知らせか何にもせよ奇異なる事を見る物じやナアハ、ア是はよめた心當りは山住の女が連れるいつもの子藏ドリヤ一ぶく呑んで待つべいか

(たき木を下にしき一ぶくする)

錦の袂引替て木の葉衣を露霜に染てあけ路の山姥さ人や岩間の苦清水心細道たごたご枝を力らに歩み來る(百覽山姥枝を持つ出る)

斧藏 おふくる今日はまだ逢ひませぬの山姥 ナ、山賊ごの斧藏殿またたき火の御馳走しませふかいのふ

斧藏 夫れば忝ない時に子藏はごうしまし
たな
山姥 されば、あの麓までつれ立つて來ましたか、おほかた猪と狼を相手に相撲かな取

つていましやうわいな

斧藏 それは危ない早く爰へよばッせへ〜
山姥 ほんにマア過ごましい事であるぞいの
ふ

「ア、おごまじやごかこち事夫と見付けて
あれ〜御ろふじませあの様な大きな石を
持ち遊んで怪我でもしたらごふせうと思や
るぞ道草も程があるコリヤ怪童丸〜ヤイ
怪童丸 ナ、イ

「神楽月にて片山里を笛や太鼓で面白や足
のつめたいに草履買ふてたもれよ子をころ
ころの子が目つき跡の子が目つき籠め籠
め籠の中の鳥はいつ〜出やる夜明けの晩
につる〜〜つ〜はいいた木の根笹原く〜
り〜いつてひよいと出た緑り子
山姥 コレ〜怪童丸早ふおじやいのふ
怪童丸 アイ

「母をしたらうて山道を尋ね木咲の梅の花よ
きか〜きこんな花折つて来たよ口仕打せふ
さふりたて〜いたづら盛りぞ愛らしき

斧藏 ヤレ子藏よく歸つて来たな

山姥 ナ、よう戻つておじやつたらふサアサ
アイいつもの通りおち様へおじぎぢや〜
斧藏 ナ、おじぎがよく出来ましたな
怪童丸 か、様何ぞ下されや

山姥 おさなしう遊んでおじやつた其ほうに
此間からあつかのべ、織つて着せふと思ふ
てな山路めぐらぬ其ひまに五百機立る窓の
内

「花の鶯糸くり細くり織つて着せたる母の
ほんそ子里へさおれば里の土産ばでん〜
太鼓にふえ鼓つつか空纏のから衣干せい萬
せいの衣だに合す鼓の拍子面白や
怪童丸 サア是から馬事じや〜
斧藏 ドレ〜おれが〜物をかしてやらふ
此まさかりを馬にして

山姥 母がばやしてやりませう
「月毛にあらぬ斧の駒くるや手綱のり〜し
げに
怪童丸 先のけ〜〜る

山姥 お月様いくつ

怪童丸 十三七ッ御供はいくつ
山姥 八十八ッ
「ほんにソリヤ若いなア母の胎内けやぶつ
て産所も産湯も山なれば
取上げお婆に事をかき産湯の替りに四方赤
あびせられたかごつこもかもまつかくなつ
て北懸の踊りくごきは何ぞ言たおらも在
所はな奥山のて〜うちでんぐり〜栗の
木のきの根を枕にござれたいてころび寝
怪童丸 か、襟乳のまふ
「乳呑みたいさ足すりばぐわんせなき子の
ならいかな

山姥 是はしたりごうした物サア〜是から
又いつもの山めぐりの話を聞かせまし
やうぞや
斧藏 なに山めぐりの話し〜コイツは面白かる
ふわ〜
山姥 何のいなア昔語りもはづかしい有し姿
もごこ〜やらむわうの瀧に髪洗ひ若葉を見

ては春を知り妻〜鹿の音を聞きて秋と思
ふて深山路をあした〜の山めぐり

「よし芦びきの山廻り四季の詠めもいろい
ろに浮立空の彌生山桃が笑へば櫻がひぞる
柳は風のお〜よふに誰を待やらに手まれぐ
霞の帯のしんきらしめて手と手の盆踊り
なくこの池にうつりぎのうらみ過しの梶の
葉は露の玉草おち葉てこがれてぬらす袖の
梅ツイだまれきて空咲の梅の層も市早く門
に松たちやナンナ終難も出るかと思へばほ
こ〜ぎすあやめふくまに盆の月待宵過ぎて
菊の宴はや祝月里神楽ほんに〜世話處浮
世も我も自雪つるの山廻り〜
(是迄所作手踊あつて)

斧藏 ホウ此程より心を付けて何ふ所扱は柔弱
非力をなくやみ、横死をさげし坂田の藏人が
妻伴此山中に籠るご聞きしがもしや二人が
山姥 いかにも其坂田の家を起さんご山神祈
誓をかけ則ちもうけし此怪童丸

斧藏 扱こそ我推量に過はず時行が妻伴よ、

なざるにても女に稀なる心ざし其丹誠に山
神の加護伴が勇力嘸あらん力の程も見たい
見たい

怪童丸 おもちれい〜
山姥 コレ〜怪童丸大事の所ぢや負けまいぞ
怪童丸 ナ、合點だ
「神變不思議の怪童丸こなたはあしたの勇
力士いらつて傍なる松の根こきに引抜につ
こご笑つて立たりしは人も恐る〜許りなり
(是にて怪童丸傍の松の根ぐら引抜く)

斧藏 松の根こぎ面白サア打て来い怪童丸
怪童丸 合點だ
「打てかれば身をかわしすかさず絶氣の
力縮幹より腕のふしくれてしつかさつかめ
ばめり〜〜ふんや〜これち合ひしむ
中よりやつこれち切つて左右へ分て立たり
しは目ざましかりける次第なり

斧藏 ホ、ウ力の程見へた〜今よりしては
頼光公の家臣ごなし父が家名を其儘に坂田
の金時ご名乗らせん、よろこべ〜

山姥 ハ、ア有難や忝けなやコリヤ怪童丸ふ
から坂田の金時ごいふ侍に成るのじやが
うれしいかや

怪童丸 そんならおつば侍になるのかうれし
い〜
山姥 さりながら今別るれば此母はモウ逢ふ
事はならぬぞヤコレ怪童丸へおぢや
「夫ごのかたみ見るにつけそなたの大事
さ大切さけふ別るれば今宵より母一人り寝
に寝屋の内さぞ面影のなつかしがる頼光君
へ御奉公つごむるひまの明暮に
武術をはげみ立身せふ必らず〜人様に
山姥が子ご笑はれな今別る〜共此母がそ
なたの陸身に付添てなお行末を守るべし
さば言ふもの、是はママ名残りおしやいご
しかご抱きあげいだきつき思はずそつこ下
辱もごたまにひびきてあわれなり
(これにて山姥の祝舞、斧藏、怪童丸もよ
ろしくからみて) 幕

山姥 さりながら今別るれば此母はモウ逢ふ
事はならぬぞヤコレ怪童丸へおぢや
「夫ごのかたみ見るにつけそなたの大事
さ大切さけふ別るれば今宵より母一人り寝
に寝屋の内さぞ面影のなつかしがる頼光君
へ御奉公つごむるひまの明暮に
武術をはげみ立身せふ必らず〜人様に
山姥が子ご笑はれな今別る〜共此母がそ
なたの陸身に付添てなお行末を守るべし
さば言ふもの、是はママ名残りおしやいご
しかご抱きあげいだきつき思はずそつこ下
辱もごたまにひびきてあわれなり
(これにて山姥の祝舞、斧藏、怪童丸もよ
ろしくからみて) 幕



故名優の檀特山

川尻 清 潭

「熊谷の型」を書いて送れよの御注文に従ひ、最も多く手本とされて居る團十郎と團藏との所演を対照して御覽に入れ
ます。但し兩優共に上演の都度、多少は工夫を仕替へた點もありますが、そうした細目に渉る事は又の折に譲るとして
爰には大體に於て殊に特長のあると思はれる、優れた演技を集めて記述し、兩優の舞臺を比較する事を趣旨としました
折柄如月の中座に上演される中車老の熊谷は、殆んど初役同様で、まだ内容は見た事がありませぬけれども、團門の古
參だけに師匠の型を寫して見せるでせう、しかしいろ／＼古い型を知つて居る優の事ですから、或は又外の目新しい
演技を見せるかとも考へられます、そうすれば尙更以て、勤める人々に依つての、それ／＼の工夫の痕が窺はれて、そ
れを比べて見る時、一層好劇家の興味をそゝり得る事であらうと思ひます。

團十郎の熊谷

陣門

△小櫻の大鎧に義經小手の拵へ、鹿の角の兜を着し、兩手を握つて下した形ちで花道から早足に出で、兜の眞廂へ一寸手を掛け平山を見て「平山殿」か云ひ、平山が、小次郎は陣門へ斬入つた云ふの聞き「南無三」で武者震ひを二

團藏の熊谷

陣門

△大鎧に鹿角の兜を着し、右の小脇に槍を抱へて花道より駈出で、平山の尊詞を聞く間を、股を割り左足を折つて體を其方へ傾け、左手を兜の縁に掛けて聞耳を立て、忼小次郎が陣門へ斬入つた云ひ聞き「南無三」を驚く所へ門内より

つ程して舞臺へ來るに、門内より軍兵が出る、熊谷は刀を抜いて横一文字に振上げたまゝ、左の手先を一掴に開いて前へ突出し、押すやうな形で左足から上げて大股に陣門へ入る

△門内より自分の兜を冠せた小次郎を、左小脇に抱えた様で立出で、自分の體でそれを隠すやうにして平山の前を通り花道の附際迄行き、又平山の目を逃れるやうに、小次郎を右小脇に抱へ替へ入る

海邊

△花道を馬上で出で、スツボンの所へ止まり、呼留の詞臺があつて、床の「しばし／＼」で、左の手で馬の首を左へ押除け、右手の陣扇をサラリと開き、手の甲を表に見せた形で振上げる

△つほめた陣扇で馬を打つて舞臺へ來て、母衣の引擦らない速度で大きく輪乗りをして、浪打際迄行つて跡へ戻り、更に體で馬を煽つて一の浪手搦二の浪手搦を「ハオー／＼」と聲を掛けて乗切る

組打ち

△浪幕を振落すに、熊谷が上手の位置で、敦盛を押へ付けて

軍兵が出て來るのを、それへ槍をつける形ちに構へ、床の紋に乗つて大股に陣門へ入る

△陣門の中より、自分の兜を冠せた小次郎を左の小脇に抱へた様で立出で、平山に附廻しになつて下手へ來て、花道の附際で、小次郎に冠せた兜を一丈上げて見せるやうにしてすぐに一散に向ふへ入る

海邊

△馬上で舞臺を大きく駈抜けて、一度上手へ入り、更に浪手搦の中を乗切りの形ちで下手へ入る

組打ち

△浪幕を振落すに、正面向きで、上手に居る敦盛の右の手を、下手から捻上げて居る形で躍上り、舞臺が納まるに、一度その手を離し、更に又もう一度捻上げて組伏せ、「斯く御運の極まる上は」から「仰せ置かるゝ事あらば」云々の尊詞を、敦盛に飲み込ませるやうに、目で知らせ乍ら思入

居る向合せて躍上り、敦盛が其手を拂ふのが、兩人の右の手が交叉する形ちになり、熊谷が敦盛の右の手を取つて下手へ来て捻伏せて、「斯く御運の極る上は」云々の臺詞があつて、床の「懇ろに申すにぞ」で手を離して引起し顔を見合せ、敦盛が兜を脱ぐ間に、落ちて居る自分の刀を鞘に納め、石の高合引へ腰を掛ける。

△床の「木石ならぬ熊谷」もの件は、何にもしらずに腹藝でちつこ耐え、「見る目涙に」で、膝に突いて居る手を一寸外す△床の「鎧の塵を打拂ひ」で、立上つて敦盛の刀を鞘へ納めて、兜を左の手に持たせてやり、下手より陣扇で、敦盛の鎧の前裾を打拂ひ、上手へ廻つて後を拂つた儘上手に居る△床の「折ふし外に人もなし」で、四邊を見廻し、敦盛に落ちよ云ふ臺詞の中、「沖に懸りし御座船は、渚七八反な、よも過ぎまじ、早落給へ」云ふ（此臺詞本文になし、七世團十郎より始まる三言ひ傳ふ）。

△「早う」で、陣扇で自分の胸を二つ叩き、其陣扇を立て、下へ突き、左手を改ためて大きく脇腹の所へ當るやうに構へて辭儀をして、下手の合引に腰を掛け、爰で始めて陣扇を右の手で膝へ突き、今度立上る時には、鎧の腰へ手を掛けて、二三度揺り上げる事をして立つ。

△本文の平山の出る件を跡へ廻し、床の「御後に立廻り、彌陀の利剣心に唱名」で立上り、上手へ来て刀を抜いて前へ出して一度見せて後で振上げて斬兼ね、敦盛の顔即ち倅小次郎の顔を、見納めに見たい心で下手へ来乍ら、刀を持つた右の手が段々に下り、左の手の甲を敦盛の顎に掛けて見下すが、床の「歎きに時も」で、「ドンヂヤン」の鳴り物を打下し、一度下へ伏して立上り、足を割つて、左の手の甲へ刀の峯を横一文字に受けた構へで極る。

△床の「後の山より武者所」で、本花道の揚幕の前の岩山のうへへ平山が現れる、體十郎系の大道具の飾り方は舞臺一面を須磨の浦にして、見物席の方を嶋越に見立た詠へ、平山の臺詞で、平家方の大將を組數乍ら助くるは二心に紛れなし、三言はれて、はつこして思はず足を踏出し、又其足を引いて敦盛の顔を見合せる。

△敦盛が「早々首を打たれよ」云ふので、熊谷は「倅小次郎直家ミ申す者」云々の臺詞になり、床の「坐る涙に」で右の手に下けて持つて居た刀を、左の手に持替立て、右手を左手の二の腕に掛けた形ちで極つて泣き上げる。△敦盛が自害をしかけるのを見て、「早まり給ふな」云々で傍へ行つて留る、敦盛が「疾く、首を刎ねられよ」云

で云ひ、下手へ来て、石の高合引へ腰を掛ける。△床の「木石ならぬ熊谷も」で、腰を掛けて兩手を膝に置いた儘、段々に目を大きく開いて敦盛の方を見て、「見る目涙に」で、膝に突いて居る手を一寸外し、改めて兩膝の附根へ大きく構へ直す、但し此仕科の間、義大夫の文句を、一掴に持たせて語らせる。

△床の「鎧の塵を打拂ひ」で立上り、其處に落散つて居る自分の刀の身を鞘へ納め、更に敦盛の刀を鞘へ納めてやり、陣扇で敦盛の鎧の塵を打拂ひ、同じく其處に落して居る兜を敦盛の手に持たせ、「落ち給へ」の臺詞で招じる形をして、左右に立別れて、熊谷は借花道、敦盛は本花道の方に掛ける。

△床の「後の山より武者所」で、下手の大臣柱脇の岩山のうへへ（團藏好みの大道具の飾り方は、上手を須磨の海岸、下手を嶋越に見立た詠へ）、平山が出て、熊谷の二心を責る臺詞を云ふ。

△床の「熊谷はつこ許り」で、熊谷は敦盛の顔を見合せるのが「黙然たり」の文句一杯になつて兩人元の位置に戻る。△敦盛が鎧を脱ぎ、西に向つて合掌するのが、床の「御目を閉ぢて待給へば」になり、此間熊谷は腰を掛けてちつこし

て居る。

△床の「御後に立廻り」で立上つて、上手へ来て敦盛の後に立ち、刀を抜き、振上は上げ乍らで、刀を一度敦盛の前へ出して見せ、一つ廻つて右の肩へ擔ぐやうに立て、持ち顔で泣く表情をする。

△床の「玉の様な御粧ひ」で、斬兼ねで下手へ来乍ら、擔いで居る刀を段々に下け震はせ、「胸も張裂け、チン／＼」で下手から敦盛の顎へ左の手を掛けて見下して泣き平山が見て居る事に氣が付いて、「氣おくれに」で、よろけるやうに一イニウ三イ三絃に合せて上手へ戻り、改めて刀を右の肩へ擔ぐやうに振上げ、「太刀振上げし手も弱り」で又斬兼ねの仕科、此時「ドンヂヤン」の鳴物を打下し、一度下へ伏し、氣を取直して立上り、刀を左手へ持替立て泣き上げる。

△「倅小次郎直家ミ申す者」云々の臺詞があつて、床の「さしにもに猛き武士も」で、右から左に自分の體を見て泣き上げる。

△床の「是非なしミ突立上り」の所、本文に在る「順縁逆縁俱に善提」の臺詞は言はずに、只「南無阿彌陀佛」だけを言つて、又刀を振上げ、斬兼ねの仕科に震はし、思ひ切つて刀を一度前へ出して見せ、「エイ」を聲を掛けて首を切落し

ふので、上手の後へ廻り、本文通り「順縁逆縁俱に菩提、
未來は必ず一蓮托生、南無阿彌陀佛く」云ひ、刀を一度前へ出して見せて、右の肩へ擔ぐやうに振上げ、「エイ」
と聲を掛けて首を打落し、敦盛の倒れた體の前へ出て、大きく泣き上げる。

△床の「人の見る目も恥し」で、血刀を左手を曲けた折か
びみの所へ挿んで拭いて鞘へ納め、右手で敦盛の切首を取
つて両手で抱へて立上り、右足よりヒヨロ／＼よろけ
て舞臺ばな迄出て、左の手を切口に受け、右手で髻を取
つて、表面を向けて稍高く、揚幕の方向へ差出し床の「臺
りし聲を張上げて」で「平家方に隠れなき」云々の臺詞を
絃に乗つて言ひ、更に「かーちーきー」長く引いて
言ふ。

△平山が退くので、首級を持つた儘右の手がダタリ下つて
僅に後へよろけるのが、床の「磯に伏したる玉織姫」で、
倒れて居る姫が起上つて来て聲を掛けるので、熊谷は敦盛
の首を後へ隠す。

△姫が敦盛の妻を定まる玉織姫」云ふので、熊谷は「ナ
ニ敦盛卿の御簾中」云々の臺詞あつて、姫の手疵の様子を
見やり、團十郎一流の入れ事の臺詞で「たい随のぶかに貫
くは候へさ」云々で、姫の手を持つて首級を渡す。
△姫が敦盛の首級を探つて「ワ」を聲を上げて泣くので、
熊谷はツカ／＼花道の附際まで行つて、ちつと揚幕の方
へ見入り、のそ／＼歩いて海邊の四邊を見廻る心で下手
の大臣柱の後へ入り、玉織姫の愁歎が済む頃のそ／＼ミ
出て来て、腕組をして突立つて見て居る間に姫が落入る。

△姫と敦盛の死骸の稍近くへ歩み寄つて、「いつれを見ても
苦の花、都の春より知らぬ身の、今魂はあまざる」の
臺詞を云ひ、姫の手から敦盛の首級を取らうとして取れぬ
心、鏡の引合せから掛佛を出して左の手に持つて戴き、右
で片手拜みをして、團十郎一流の入れ臺詞の「流轉三界思
愛不能堪、ぎをんに無異、眞實放捨、南無阿彌陀佛く」
を云ひ、佛を引合せて納め、姫の手から首を離して、それ
を持つて立上り、一度首級を下へ置き、敦盛と姫の亡骸を
それ／＼上手の浪打際から海へ流し入れ、桶へ乗せて敦盛
用の母衣を掛け、長刀で押流した時もある、跡を見送つ
て拜む。

敦盛の倒れた體の前へ出て、大きく泣き上げる。
△人の「人の見る目も恥し」で、血刀を袴の裾で拭き、刀
を鞘へ納め、臺りし聲の張上げて」で、敦盛の首級へ手を
掛けて泣き上げ、それを両手で抱えて立上り「平家方に隠
れなき」の臺詞を乗りで云ひ「討取つたり」で、左手を首
の切口に、右手で髻を持つた形で、下手の平山の方を向
いて、差出して見せる、平山が是を見届けて勝鬨をする、
熊谷も「からさき」の聲を擧げる、平山が入る、熊谷は氣
がゆるんで、ヨロ／＼よろけて、首級の髻を持つた儘
の右の手がダタリ下る。

△床の「磯に伏したる玉織姫」で、上手の背間に倒れて居る
姫が起き上つて来て「妻を定まる玉織姫」の臺詞を云ふの
で、熊谷は一寸首級を隠す仕料をする、姫が「もう目が見
えぬ」云ふので、それを確める爲に、姫の目先へ手を出
して二三度動かして、全く見えないのに安心して首級を渡
し、以前の捨石へ腰を掛け、姫の落入るまでを見届けて片
手拜みをする。

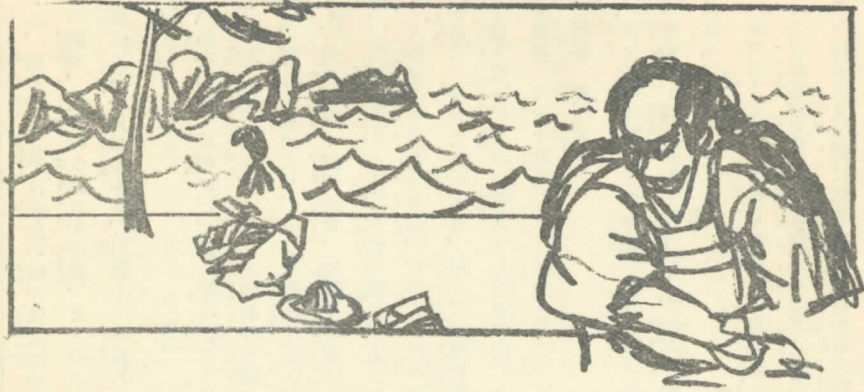
△床の「熊谷は茫然」で立上り「いづれを見ても苦の花」
の名臺詞を云ひ、姫の手から首を取らうとして取れぬ仕料
片手拜みをして口の中で念佛を唱へ、首を抱へた姫の手の
指を一本づ、離して取る。

△床の「母衣をほぎいて敦盛の」で、後に在る熊谷の紫の
母衣を右手差を抜いて切り取り、それを風呂敷に◇形に據け
て、敦盛の首級を包む、此手順は、最初首の後方の裂の端
を取つて後から、冠せ、次ぎに前方の裂の端を取つて
時、思はず死首の顔を見て、はつ／＼して急いで包み隠し、
更に左右の裂の端を両手で同時に取つて、床の「押包み」
の文句の切れの「チ、チリンチ、チリテツ、ン、ツ、ツ
ン」云つたやうな、絃の調子にキチンと嵌めて、上部
で結び納め泣き上げて極る事になる。

△跡を「チンチリトチ、」云ふ、千鳥を稱する絃でつなき
其邊に落ちて居る桶へ、敦盛と玉織姫の死骸を乗せ、上手
の浪打際へ押出、玉織姫用の黒柄蒔畫の長刀を拾つて、其
柄で海の方へ押やるのが、絃の掛りになり、流れて行く桶
を見送るうちに、浪が打寄せて来る心で段々跡さざりを
し乍ら、絃曲に乗つてよろけて、長刀をトンミ突いて肩に
支え、両手を掛けて極つて泣き上げ、更に其長刀を横一文字
に持つて海の中へ投入する時、赤に黄の二筋が、翻つて飛
んで行く事になる。
△下手の大臣柱の後から馬を引いて来て、敦盛の鏡兜を馬上

△床の「母衣をほぎいて」で、紫の母衣の端を右手差で切取り、それを風呂敷にして、前後左右の順に包み上で結んで其處へ置き、下手へ入つて馬を引出して来て、首級の手前で馬の頭を上手向きに横位置に立たせ、敦盛が脱ぎ捨てた鎧を馬上に積み、上帯をあぶみへ通して結び、次に太刀を右手差を付け、兜を馬のたてがみの末へ乗せ、丁度敦盛が馬上に打伏して居るやうな形ちに縛り付け終つて、(後見)に手傳はせる事、首級を左手に抱へ右で馬の口を取つて馬と共に正面向きになるのが、床の「右手に轡の文字」になる。△院本の文句を逆に、「悉陀太子を送りたる」云々の臺詞を先へ云ひ、それから本文の元へ返つて、床で「檀特山の愛別れ」を語り、熊谷は馬の首の下へ自分の首をもぐらせ、馬の平首へ頬を當た形ちの横向きで泣き、すぐに體を元へ戻して、馬の口を取つて馬と共に上手へ二つ廻り乍ら轡の手を離し、下手へ来る位置になつた時、首級を右の小脇に持替、悲歎のこみ上げて来る思入で泣き落ちて下に居る時「ドンチャン」の鳴物を打込むので馬が跳上る、熊谷は氣を取直して突立上り、左の手で轡を取つて右の足を踏出した大見得、で木の頭、馬の首を高く上げた形ちで幕。

へ積み、それを紫の母衣で結び付け「黒衣の後見が出て手傳ふ」最後に敦盛の首級の包みを左の小脇に抱えて立上り、右手で馬の口を取り、「悉陀太子を送りたる、車のく童子が悲しみも」の臺詞を云ひ、床の「檀特山の愛別れ」に成つて、憂ひの仕科のうちに手綱を離して下手へ來乍ら、首包を右の小脇に持替、改めて左の手で馬の口を取る。△床の「同じ思ひの片手綱」で、左手の馬の口を取つた儘右の足を大きく踏出して下手へ行掛け、體ごこ首を振向けて、上手の浪打際の方を見返り、左で取つた馬の口を一つ引いて前へ出やうとする、馬の方で又一つ引返す、これを床の絁に合せて、一、二、三、四ウミ引合ひ、ト、馬の首を持ち上げて泣き上げて極る、右の形ちの儘で下から上へ一つ廻る間に、それまで取つて居た馬の口から手を離し、兩手を首包に掛けて悲しみの思入をする、此所へ丁度馬の首がうなだれて来る順序で、それを右の手で拂ふやうに打つ、馬が跳ね上がるので、改めて右の手で馬の口を取るのが木の頭、束に立つて左へ首包を抱へた大見得で、幕。△團十郎の拵へが白檀の大鎧に本草鞋云ふやうな好みに引替へ、團藏は絞袖に金房、鍔金の草鞋云つたやうな大時代物の物を用ふる。



中座如月興行上演臺本
中華一の谷嫩軍記 檀特山の場

敦盛 彌治郎
熊谷直實 中車
玉織姫 宗十郎
平山武者 箱登羅

本舞臺向ふ一面須磨の浦の遠見、三段に波手摺上下岩組の張物よろしく、波の音にて道具納る。

去る程に御舟を始め一門皆々、舟に浮べば御座舟も、兵舟もはるかに沖へのび玉ふ(下座の謡よろしく浪幕切つて落す、是より床の上るりになる)

無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座舟に馳付て父經盛に身の上を告知らさん急がれけり

(此内向ふより敦盛いぜんの形にしてしづこ出で來り)

須磨の浦邊へ出られしが、船一艘もあらざれば誰方波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打せ玉ふ

(波の音になり、舞臺へ來りこなしあつて上手へは入る、遠見の子役敦盛にて出て來り、この手にて後ろ向になり、一こそ歩行ある)

かゝりける所に後ろより、熊谷の次郎直實

熊、チ、イ、イ、

チ、イ、イ、と聲をかけ、駒をばやめて追かけたり

(向ふより熊谷いぜんの形母衣を穿負ひ黒馬に乗り日の丸の陣扇を持ち出て來り花道に留まり、舞臺を見て)

それへ渡らせ玉ふは平家の大將軍と見奉

る、斯く申す。某は武藏の國の住人士の黨の旗頭、熊谷の次郎且直實、まさのふも敵に後ろを見せ玉ふか、引返して勝負あれ

テ、イヤ、扇をあけて差招けば、敵に聲をかけられて、何か猶豫の有べきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進みより、互ひに打物さしあがし、朝日に輝く劔の稲妻、駈寄り駈寄せてうぐ、蝶の羽がへし、諸鎧の袖はひらく、群居る千鳥むら千鳥、むらぐげつこ引込に、寄せてはかへり、歸しては又打寄る虚々實々、互ひに勝負もあらざれば

遠見敦盛 イテヤ組ん 同 熊谷 實に尤も。馬とならむらにむんす組、エイ、の聲の内、鎧をかむと踏ばし、兩馬も間にさふさ落

(せり上知せて波濤を落し、舞臺真中より熊谷、敦盛組打の見得にてせり上る) ヲはやみ見る間に熊谷は、敦盛を取て押

熊 斯く御運の極るうへは、御名を名乗り直實が、高名譽れを顯させ玉へ、又今生に何事にては仰置る、御事あらば、必らず達しまぬらせん

敦盛 チ、やさしの志し、敵ながらも道れ勇士、斯く情けある武士の手にかゝり死せん事、生前の面目、我戰場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、

去りながら、忘れ難きは父母の御恩、我れ討死と聞き給は、さぞ御歎き思ひやるせめて心を慰さむ爲、討れし跡にて我死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ參議經盛の末子、無官の太夫敦盛なり、

も、見る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し、鎧の塵を打ちばらひ、

熊 扱こそ參議經盛卿の御公達にておはすよな、此君一人助けしめて、勝軍に負もせまじ、沖にかゝりし御座船は、渚七八んはよも過ぎ、折ふしあたりにもなし、一先づ爰を落たまへ、

平 ヤア、熊谷こそ、平家方大將を組敷ながら助くるは、二心に紛れなし、きやつめ、諸共討てこれ、

敦 逆も退れぬ平家の運命、爰を助かり行先にて、下葉下郎の手にかゝり死罪をさらさんより、早く御身も手に懸つて、人の疑ひ晴されよ、

玉 西に向て手を合せ、御目を閉て待給へば、いたわしなから熊谷は、御後ろに立廻り、

彌陀の利劍と心に唱名、振上げながら、玉のよふなる御粧ひ、情なや無慘やも胸も張さく氣もおくれ太刀振上し手も弱り、思ひにかきくれ討兼て、敵に時もうつるにぞやア、おくれしか熊谷、早々首を刎られよ、捻向き給ふ御顔を、見るに目もくれ心さ

熊 情小次郎直家と申すもの、丁度君の年格好今朝軍に魁して、手疵少々負ひたる故陣屋に残し置たるさへ、心にかゝるは親子の中、それを思へば今爰で討ち奉らば嘸や嘸、御父經盛卿の御歎をさこそ思ひ廻されて、

敦 やア愚かや直實、悪人の女を捨て善人の敵を招けば此事、はや首討てなき跡の回向を頼む、左なくば、此の場に於いて生害せうか、

敦 卑怯な汚名をさらするか
熊 さあ、それは
敦 但し首を打たるか
熊 サア
敦 サア
熊 サア
敦 はや、首を刎られよ、
熊 ヲこそ立上り、
順縁 逆縁共に菩提未來は必ず一蓮托生、南無阿彌陀佛、
熊 ヲ首は前にぞ落にけり、
平 平家方に隠れなき、無官の太夫敦盛を、熊谷の次郎直實を討ちこつたり、
平 平山是にて見届たり、
熊 かしごき
熊 かしごき
大勢 エイ、チウ、

(ごんちやんを打上げ平山は入る)
玉 磯に伏たる玉織姫絶入りし氣も一筋に夫を慕ふ念力の耳に入りしむつくと起きは如何なる人か恨めしや、
玉 せめて名残に御顔を
玉 一と目成さも見せてたへ、
玉 云ふ聲もはや深手に弱る患遣ひ、見るより熊谷御首携さへ歩みより、
熊 敦盛卿を慕ひ給ふはいかなる人にて渡らせ給ふや、
玉 尋ねれば、今端の苦しきこわれにて、自らこそは敦盛様の妻さ定まる玉織姫ナニ、スリヤ敦盛卿の御簾中、ア、玉織姫様さな、
熊 敦盛様を討たさある、シテ其御首はごここに、
熊 サア、
玉 ござうと一目見せてたへ、
熊 サアその御首は、

玉 ドレごに、チ、モリ目が見へぬか悲しやなア、

熊 エ、お目も見えませぬさな、胎腫深く貫き肝過忽ちに衰るへ最早お目は見えませぬナ、

玉 して御首はごに、
熊 チ、御いたわしく候へども、今は誰憚らず、敦盛卿の御首は則ち是に、

ハア………（泣伏して）のふ敦盛さま、まか、ア、はかないお姿になり給ふ、陣家を出させ給ひしより、御跡を慕ひ方々尋る内に源氏の武士、平山の武者所、わらはを取らへて無體の戀慕、だまし討人も女業、此如く手に懸り二人が二人で悲しい最期、

ハア………（泣伏して）のふ敦盛さま、まか、ア、はかないお姿になり給ふ、陣家を出させ給ひしより、御跡を慕ひ方々尋る内に源氏の武士、平山の武者所、わらはを取らへて無體の戀慕、だまし討人も女業、此如く手に懸り二人が二人で悲しい最期、ハア………（泣伏して）のふ敦盛さま、まか、ア、はかないお姿になり給ふ、陣家を出させ給ひしより、御跡を慕ひ方々尋る内に源氏の武士、平山の武者所、わらはを取らへて無體の戀慕、だまし討人も女業、此如く手に懸り二人が二人で悲しい最期、ハア………（泣伏して）のふ敦盛さま、まか、ア、はかないお姿になり給ふ、陣家を出させ給ひしより、御跡を慕ひ方々尋る内に源氏の武士、平山の武者所、わらはを取らへて無體の戀慕、だまし討人も女業、此如く手に懸り二人が二人で悲しい最期、

「また御首を撫さする、宵の管絃の笛の時に後にごありしお詞か、今世後世のかたみかや、

此世の縁は薄くとも、未來は必ず未長う添えてたべわが夫さ、顔にあて身に添て、思ひの限り聲限り、聞音は須磨の浦千鳥、涙にひたす袖の海、引汐時と引息の血死期と見えて絶果たり、熊谷は淫然と、

（此内玉織姫首にすわり愁の思入にて落る）

熊 ア、何れを見ても菅の花、都の春より知らぬ身の、今魂は天さがる扉に下りてなき跡を、問ふ人もなき須磨の浦、なみなみならぬ人々の、なり果る身のいたわしやなア。

（立ち寄つて、玉織姫の抱へし首を取らうとして放さぬ故に）

流轉三界恩愛不能斷、歸恩入無爲直實放捨南無阿彌陀佛。

ハ是非もなく玉織の亡骸を取納め、

（兩人の死骸を桶にのせて海へ流し合掌する）

ハほるをほごいて敦盛の御首級を押包み、總角さつて引結び、手綱をたぐり結附る鞍の搦手やしほく、弓手に御首携さへて、

（この文句のうちに、鐵兜、太刀を首につけるこま宜しくあつて、轡をこり首を抱へて立ち上り）

右に響の哀れ氣に、悉陀太子を送りたる車匿童子の悲みも、檀特山のうき別れ、同じ思ひの片手綱涙ながらに、………

（馬を引立て、ごんぢやにて、馬跳び上るを、きつと取つてよき見得。駈け入りをかぶせて、三重にて）

幕



内證話

相馬大作

額田 六福

二月は浪花座で、澤田正二郎君の一座で、私の「相馬大作」が上演される相である。そこで、峠谷さんから、それについて何か書けよ云ふ手紙が舞ひ込んで来た。が、困つた。何も書く事がない。

これは、ごんぢに限らず、上演の時には、よく方々の雑誌から聞かれる事だが、全く書き様がない。勿論、假にも一つの作をものす以上、空々寂々筆を取れるものではない。大なり小なり、理想もあれば、主張しやうとする處もある。

「云ふに、すかさず『ぢや、それを書けばいい。』」
「云はれるかも知れないが、それが私には無駄骨の様な気がする。たごへこで『私はかくくの大理想の下にこの作を書いた』と、縷々幾千言を費したつて、肝腎の舞臺の上で

それが判然と浮き出して來なかつた日には、何にもなりやしない。反對に、黙つてゐたつて、作の素質さへよければ、観客は判然と作者の心持を汲み取つて歸つて呉れる。『作家に理屈は禁物だ。』

「私はいつもさう思つてゐる。だからいつも黙つてゐる。演劇論文は一人前？に出來ても、からきし舞臺にも上らなような作を書く新人？達を冷笑してゐる。そこで、今も、ただ芝居を見て下さい。云ふ丈けより外に何も云ふ事はない。脚本は舞臺評論の二月號に二幕丈け出でゐる。」

しかし、それでは餘りに曲がないので、本が出來たまでの内證話でも書いてみる。苦心談云ふわけでもない。苦心は當然の事だ。事々しく吹聴する事ではないから――。

去年の一月に白野辨十郎が樂になつた時、『今年中にもう一つ二つ書いて貰ひたい。』と云ふ澤田君の話、『書かして貰ひませう。』と云つた時、不意に相馬大作の事が浮んで來た。と同時に、一體に今までに何故新國劇で大作をやらなかつたのか、不思議にさへ思つた。が、何でもいゝ私には堪り出し物の様な氣がした。

『結構です。是非。』

澤田君もよろこんで呉れたが、いつくまで云ふ事も判然とはきめなかつたので、ついでにびんになつて、夏が來て仕舞つた。八月の帝劇の樂屋へ遊びに行くに、『九月の邦樂座に頼む』と云はれた。處が相憎に『阿國出世』を書いてゐたので、斷るに、『ちやあ九月の二の替』と云ふ事になつた。

そこで、八月一杯に上げればいゝと、やゝ氣をゆるめてゐるに、八月の十日頃竹田君が汗みぎろになつて飛びこんで來て、『九月の面はりに書け』との嚴命、あま上げ本まで五日しかない。これには流石の小生も面喰らつて仕舞つた。やうやう譯を云つて、先約通り二の替に云ふ事で、歸つて貰つた。それにしても、もう二週間しかない。宅にゐてもとてもやれさうにないので、ごこか、安くて靜かな温泉場へ行かうと思ひ立つたが、夏の最中、一人で不知案内の土地へ出て行

ひはじめた。手がつけられない。仕方がないので『澤田君の顔でもみたら元氣になるだらう。』

と思つて急に行李をまきめて歸つて來た。邦樂座へ行つた。が、やつぱりいけない。白狀するに、澤田君には『全部出來て今書きかへてゐるんだ』と云つたが、その實、大詰は半分程残つてゐた。亡靈はますますはびこる。その中に澤田君は旅へ行つて仕舞つた。『十一月の演舞場まで』と云ふ事になつた。

そこで、文字通りに初めから清書をはじめた。これが容易な事ではない。たゞその中で、

『シラノは十九世紀中の世界で屈指の名作だ。それと比較するのは無理だ。』と、そんな逃げ道を見つけた。でもやつぱり日はのびる一方。電報が三通も三通も來る。竹田君が氣の毒さうな困つたさうな顔をして來る。十月の五日も嘘にして仕舞ひ、やうく七日かに夕方書き上げるに、東京驛へかけつけて、特配の客車便に積み出して、千斤の重荷を下した様にホツとした。

越へて數日、母を呼びがてら大阪へ來て、澤田君に逢つた時、一言、『途中で止められはせぬか案じた。』

つて、虐待されても困るので、やつぱり伊香保へ行くことにした。伊香保の金太夫は、『月光の下』以來連年の馴染なので、電報一つで、この迷惑な一人客を快よく迎へて呉れた。勿論、はじめはホテルの方で、三度々洋食で悲鳴を上げたが、四五日の中に本館の方へ戻つた。でも初めは、隣が松平子爵さか、その向ふが某富豪さかで、頗る恐縮したが、その中に秋が立ち初めて、いつもの七十二號と云ふのが明いたので、自分の天下になつた様な心地がして、それまでは滯滞勝ちの筆がさんく運び出した。八月卅一日に全七幕の中、六幕まで出來た。あま二三日で大詰が出来るわけだが、不意に迷ひが出來はじめて來た。と云ふのは、一月の白野辨十郎の亡靈が榮り出して來たのである。即ちさう考へても拙い様な氣がし出したのである。

さあ、さうなるに筆がバツタリ運ばなくなつて來た。でもいよく十五日から出るにすれば、邪が非でも書き上げねばならぬ。そこで俵藤君に電話をかけるに、『二の替は出さぬから、ゆつくりしてもいゝ。』

この返事が來た。それが災をした。いやが應でも書けと云はれたら、止むなく辨十郎の亡靈を退治して仕舞つたのだから、ゆつくりでいゝと云ふので、亡靈はますます威をふる

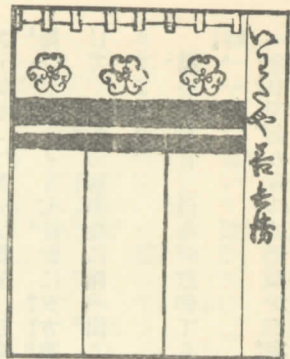
に、冷汗三斗した。

其夜(十四日?)浪花座の三階で本詰をした。午後の十一時半から初めて、三時半まで。七幕十二場、二百六十何枚を立てつづけにやんで仕舞つた。我乍らよくもつゝいたものかと思つたが、一日の仕事に勞れたあまにもかゝわらず、神妙に、煙草一服も吸はずに、聞いて呉れた一座の人々の禮に厚いにも感激した『キツミ當るぞ。』

と、心の中で思つた。私には本讀の時の一座の人の工合で大抵成績がわかる。でも、あけてみるまでは心配だつたが、名古屋もよいこの報知、新橋は大入つき。特に第三日曜は新國劇はじまつてからの大入と云ふので、ロスタンの亡靈をやつと追ひ拂つた。勿論、一緒にやつた『復活』がきいた故もあるが――。

今度も同じ狂言ださうである。白野辨十郎を歓迎して呉れた大阪の諸君は、キツミこれも歓迎して呉れるだらうと、一寸お世辭を云つて、筆を擱く。次の機会には、又私の新作の一つが同じ人の手で運ばれるだらう。

是非さうありたいものだ。又期待もして貰ひたいものだ。



「追憶の甕」を捧げて

團十郎と「壇特山」と三俳優と

富田泰彦

歌舞伎の夢の、古き扉が開かれる。中座の二月興行の舞臺に、それは「一の谷嫩軍記」の内——俗に云へば「壇特山」だつた。我等が甘美な「追憶の甕」に寫入されたものが衝動的に流れ出る。感激の影繪の踊る中に——

減び行くものゝ美しさ、春ならば、靜心なく櫻の散りしく晨、秋ならば、中空の一瞬に消え散る花火の夕、恰度歌舞伎を惜愛する人々の心持も同じ、其處に「藝術の魂」に相觸れた觀賞の歡びがわいて來る譯ではあるまいか、所詮は歌舞伎の生命も、限りある時代に盡きて行く處に、一層悲痛な魅力を作り出して呉れるものを私は信じてゐる。この意味から見て今度の「壇特山」は尊重しなければならぬ價値——でなければ、條件云つても可い。——それが十分に備はつ

斯うした舞臺上の、齟齬も要するに、操り芝居の歌舞伎化から來たしたものである。抑もは寶曆元年十二月初日の豊竹座へ上演すべく、並木宗輔は三段目の陣屋まで書いて死んだのを、淺田一鳥、浪岡鯨兒なきがその後を増補したものだ。是を歌舞伎に移したのは明和七年五月市村座で初代菊五郎の熊谷であつた「歌舞伎年代記」に據るに、今日の如く敦盛も小次郎の二役を同一の俳優の扮するやうになつたのは寛政七年秋の都府で、三世澤村宗十郎の熊谷に對して宗三郎——後の五世岩井半四郎からであることが明瞭になつてゐる。

「壇特山」をして、兎に角重き一場面たらしむべく、生彩を放たしめたのは何と云つても近世では九代目市川團十郎の非凡な技量からであつた「今日の熊谷」——それは吉右衛門にしろ、幸四郎にしろ、無論今度の中車氏のもの彼の遺跡を傳へるものゝ信じてゐる。而も團十郎の熊谷には、斯うした深い因縁があつた、明治七年七月十二日初日で芝の新堀町に河原崎座の再興された楠茸興行であり彼の爲には權之助改め九世團十郎になつた時であつた。狂言は「新舞臺巖楠」で備後三郎、楠正成の役、處が例の活歴辭から一般受けのせない處から、俄に「一の谷」の壇特山と陣屋を二幕取替

てゐる。

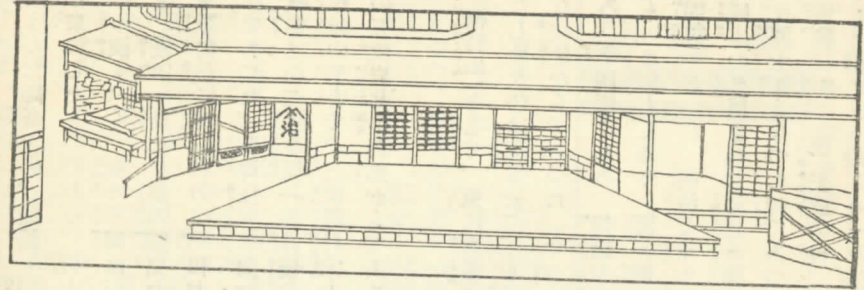
團十郎の眞盛なきは、恐らく一世一代のもの云つて可い。中車氏の熊谷も今後に、さう出る機會はあるまい。宗十郎氏の玉織姫も三優顔合せ狂言としては人を得た役云つても可い。一體に好劇家としては、何故に「壇特山」なきの場面に興味を繋ぎ得ることが出来るのか、實に脚本としては愚劣極まる脚色上の、あざささ、敦盛も小次郎も取替る云ふ彼の淺薄なトリック——而もソレが頗る不手際に、表現されてゐる彼の陣門から須磨の浦へかけての筋の破綻をも、挿ひかくしてゐるのは、全く俳優の技藝の力も、觀客の傳統的教養の賜物云はなければならぬ。——だから歌舞伎劇は難解で近代人に容れられない云ふのかも知れぬが——。

るこまになつた。此時の敦盛も小次郎も澤村訥升——今の宗十郎氏の父であつたのも因縁である。因縁云へば團十郎の敦盛も明治二十三年一月京都祇園館に乗込んだ團十郎の熊谷に依つて激賞された名譽の役だ云ふ。斯くて今度の敦盛は三十幾年振の想ひ出深きものになつた。而も敦盛を大役たらしめたのは、或意味に於ては團十郎だつた云つても可い。先々代訥升然り、續いて明治劇壇の双壁云つて可い、五代目菊五郎は前後二度もこの「須磨の組打」の顔合せで人氣を煽つてゐる。

此の嘉例に做つたのだらう。一昨正大正十四年の市村座の一月興行の久々振の菊吉顔合せにも此狂言を選んだ云ふのも、全く由緒なきこまではなかつた。實際私達も、遙々東京へ足を向はしめたのも、要するに此一場の感興に牽きつけられたものだつた。しかし今度の中座は、舞臺の劫から云つても、藝格から云つても、團十郎、中車、宗三優の「壇特山」はより以上に豊かな古典歌舞伎の滋味も古き匂ひの浸み出るやうな錦繪美の落着いた舞臺の色彩に、私達の更に見果てぬ春の夢を、追ふやうな「典型的な壇特山」の幻想の醸成されるこまを期待してゐる。

『時雨炬燵』に就て

日 比 繁 一一



謂ふまでもなく紙治は鷹治郎の得意藝の一つである。その『河庄』に續いて『時雨炬燵』も從來幾度上演せられたか知れない。無論傑作には違ひない。而し此『時雨炬燵』を疑ひもない完成品として、此まゝに終るべきものであらうか、名優鷹治郎の紙屋内の場として、これが從來何等かの型をのこすものとして、あまりに脚本が粗雑ではないか。天保前後の文藝頹廢期に生れたこの『時雨炬燵』が、現代に至るまで、何等の疑ひもなく、そのまゝに上演を持續せられたのも寧ろ不思議の一つである。

◆ それならば、文藝的にもつゝ優れた要素を有

つてゐる、近松の『天網島』に従へばよいではないか、さういふことになるが、これは先年中座の近松記念興行に上演せられた事實によること、さうも此場限りでは嫌ひない節が多い、その次の大和屋の場を併せて、首尾完結するわけであるが、それにしてもなほ、多くの研究的餘地をのこしてゐる。

◆ いまさら『時雨炬燵』の批點を數へるでもないが、私の此論を形ちづける上に於て、もう一度線かへして置く必要がある。重なる點から摘んでみる。舅の五左右衛門が金山で損をした、その埋め合はせに財産を減らした治兵衛が、わ

ざに會根崎へ通つて、身内や世間の手前を飾つてゐるうちに、つい小春の馴れ染が深くなつた。かう云つて女房おさんは表面邪慳な父親を罵つてゐる。嫌味な技巧である。而も五左右衛門は、もうひこつ其裏を行つて、表面の強面に似ず、箆笥の抽出しへ百五十兩の金を置いて、それには云はず二人に對する恩返しをしやうとする。さらに嫌味である。

◆ こんな風に數へ立てれば、かぎりもないほぎ、不自然きわるものであるが、それでゐて、その實際の舞臺に面してゐるに、つひ此嘘の世界にひきづられて觀てゐる大衆心理の多いのに心づく。それが恐ろしい。おそらく、此觀客の悉くが宿へ歸つて、劇場の空氣を離れたが最後、殆ど此人情に疑ひをはさまないものは一人もあるまい。名優鷹治郎の至藝がこんな不自然な脚本に浪費されてゐるかと思ふに、涙がこぼれる。而もお芝居流に云ふに、時雨炬燵は治兵衛の芝居さうぶよりも、寧ろおさんの芝居である。

◆ 何處の世界へ行つたつて、人の爲めに無理に茶屋遊びをするものがあらうか、さうして餘儀なく、命をかけるまでの戀をするものがあるだらうか。治兵衛の留守の店をまで切りまわしてゐる、しつかり者のおさんが、これを信じて、治兵衛を氣の毒がつてるなま、ますく沙汰の限りである。如何に偽りの道義觀念に支配された天保頃の人情にしても、こんな不自然が世の中に行はれてゐるとは思はれない。治兵衛といふ戯曲的好人物を一度にぶつ毀して幻滅を感ぜしめる。それはまだよい、幕切れに至つて善六太兵衛を殺したが爲めの心中になるに至つては、いよく幻滅である。

◆ 誰かこの『時雨炬燵』をもつて美しいものに改作する作者はないか、さうして、あの夢幻的な鷹治郎の治兵衛を充分に生かしてくれる脚本を提供してくれる人はないか。『時雨炬燵』でさへ、大衆は何年か、鷹治郎の至藝にひきづられて來て陶酔してゐる。これがもし完全なる脚本を得たとするならば、それこそ世界に誇るべき作品に相違ない重ねく残念なことである。

故多見藏さん

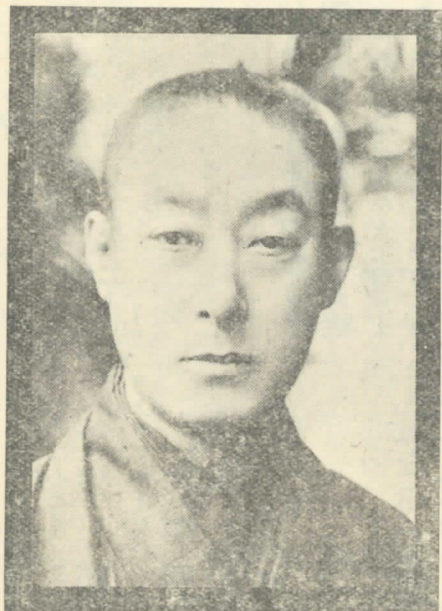
食 満 南 北

△本當に旨い役者でした、少し舞臺が叮嚀すぎるきらひはありました。よく舞臺係に、「あの松の樹を一寸上手へやつてんか？」

なんてあつらへてみました本當のミころ一寸上でも下でも大して舞臺に差支はなかつたやうです、しかし多見藏さんはそんな事まで氣にしたのです。

△私の描いた聚樂物語の増田左門が大變好きでした、そんな場合でも、あの役さへもつて行くミ、

「ウン〜〜」



故 尾 上 多 見 藏

ミすぐ外の悪い役までおさまつてしまつたものです。△晩年よく老役をやりましたが當人は若い役がすきでした。

「先代の多見藏さんでもこんな老役ばかりしやはらへなんだ」

ミある時の如きはボロ〜ミ泣いて恨んだ事がありましたそんな事で、雁金文七をした時は非常に嬉しがつて毎日ニコ〜してゐました。

△床山の伊藤さいふのがよく主人に逆らつたものです。

「ナア伊藤このかづらは少し

曲んでるな」

「阿呆らしいあんたの頭が曲んでまんね」

「さうやろか」

かうした場合でも多見藏さんは、大して怒りもしなかつた△多見藏さんは脊の低いのをひき氣にしてゐました、大分に厚い「つぎ足袋」をしてそれが爲め歩きにくい位でした、よくはたから九代目團十郎さんでも脊の低いのを氣に

しなかつたのですからい、でせう、ミいくら云つても死ぬ前までこの「つぎたび」だけはよしませんでした。

△番頭のいほ市さいふ人は可なり多見藏さんに苦言を呈した人です、そのたびに、

「渡邊よく云つてくれた」

ミ心から感謝してゐたやうです役者の中で多見藏さんのやうなのは、やはり大人ミでもいふのでせう。

△本よみを聞くのにあの位叮嚀な人はなかつたやうです、あんまり長いので二三行飛ばして讀むミ向ふの方から見ても「師匠ぬけたやうだすぜ」



朝 頼 源 (面 對)

ミ云つてゐられたやうです。△念を入れるさいふ事では殆ど外に類のない程でした。さきに話した通り松の樹の一寸上手より、もつミひさいのは「この屋臺を一分うしろへ入れてんか」

さいふやうな事までありました。甚だしい時は

「ハイ入れさきました」

ミ云つて其儘にして置くミ

「やつぱり這入つてへんで」

ミそれがすぐに解つた位です。△私は故人に就てこの位よりお話する事をもつて居りませぬ。

(二二二三)

文樂座の印象

木谷 蓬吟

東京あたりから客人が来るに、挨拶の一番乗りには『文樂は如何です?』と聞かれるに極つてゐた、その度に答へるのに閉口したほど、文樂へは大變な御無沙汰を致して居た。

その昔、攝津大塚や大隅の存生時代、法善寺の津太夫、組太夫、呂太夫などの活躍した可なりの往時、私は少年時代から、道頓堀へは餘り足を向けなかつたが、文樂や博勞町、堀江、近松座へは、藝題の替はる毎に、殆ど行かないことは無かつたからである。それが種々の事由から段々出足が鈍くなつたもので、いつか年は忘れたが、天網島を原作通り大和屋も心中場も上演しやうとあつた時、私も一分お手傳ひしたことがあつた。なんでも河庄の前を源太夫、切を津太夫、紙治の内の前を古柳、切から大和屋へかけて越路、道行から

傾向なきは、九年以前は大分の隔たりを産んでゐる、それがこんなに変化してゐるか、こんな縣隔が生じてゐるか、善くなつてゐるか、悪く變つてゐるか?

個々の藝評めくものは一切本誌には遠慮することにし、また其善悪をも別途に措て、只ズラリ一瞥一見しただけの、淺薄な印象を並べて見るに——先づ大體から観て、太夫も三味線にも人形にも、小細工、小技巧に、著るしく敏慧な賢明さの見えることである。また、節を作り聲を作り、撥を作り絃を作つて、『作り細工』に堪能な手腕を見出したことである。役者の舞臺表現に類似し、甚だ歌舞伎に接近して來たことである。そして、成る可く怪我のないやうに石橋を叩いて渡るやうな行き方、健康を損ねないやうに、腹七分目に、成るだけらくに云つた傾向があるのではあるまいか。

勿論、皆がさうである譯ではないが、玉石混淆しての所感は右の通りである。然し本當を云へば、尙ほ二三回の上演を見物しての上でないに、自信のある評言は下されないに、自分で信じてゐる。

舞臺上の人たちが、他のさうしても真似し得ない獨特の妙味を持つて云ふことは、見物の我々に取つても愉快な事である。例へば、攝津の優艶、堀江彌太夫の情熱、法善寺津太夫

心中を南部その他の掛合でやつた。殊に大和屋が珍しく好評を博したことを覚えてゐる、それつ切り文樂へは久しく疎遠になつてゐた。

今度、道頓堀へ移動興行にあつて、足場も便利になつた爲め、フラ〜と足が向いて正月興行を覗いて見ることになつた。恐らく、八年目か九年目の見物である。赤ん坊でさへ九年経てばモウ小學校へ通ふ九歳の生徒さんである。九年目に見物する文樂座!私は相當の期待を、少々の好奇心を以て七日目のお客さんの一人になつた。

九年ぶりで觀る文樂の人形淨瑠璃!それが一向變つて居ないのに驚くと同時に、また餘りに變り方のひじいにも驚いた。

九年の長い年月を経つても、一向に變つて居ないのは、その藝題も、その並べ方も、配役までである。

變つたのは太夫、三味線、人形遣ひの技倆と演技の傾向とそれから見物客一般の好尚とである。

相變らず限定された僅少な同じ藝題を繰返してゐる。その並べ方も、その役割の振り當も、相變らず同じことを繰返してゐるに過ぎない。

それには反對に、舞臺上の人たちの腕前や、その演出の

の輕妙、呂の龐大、組の剛勁、大隅の奇峭、越路の健實、春子の艶治なきがそれである。文樂座の人たちからも、斯うした逸品を探り出さねばならぬ。

見物の好尚の甚だしい變化は、時代の力も、御靈の陋巷から道頓堀へ、世界の風に當つたのが、主な原因であらう。これに就ては面白い発見もあるが、紙面の都合で後日に譲る。

最後に言つて置きたいのは、舞臺を監督する責任者存置の必要である。道頓堀の曠の舞臺へ越したからは、一層舞臺内外の注意が大切である。吉田屋の門先に何等の正月拵へもなく、あき家のやうに見へたことや、妙心寺の衝立に書いた光秀の辭世の句の違つてゐたこと——これは太夫も間違つてゐたが、順逆二門無し。大道、心源に徹す。が本當で、大道心、源に徹すではない——大詰の住吉濱邊の掛合の投げやり氣分等、等、等、日本一の文樂座、人形淨瑠璃唯一の模範道場として、細心の注意を要求したい。

も一つ言ひたいのは、朝太夫松太郎の遠來の珍客を、いかに『顔』の位置が、さうのかうのさう言つて、太十、吉田屋、合邦と續けた後へ置くことは、氣の毒至極である。こんな不人情な不合理な舊習は、一日も早く廢止することにである。全く以て同情に堪えない。

道頓堀各座の印象

中井浩水 京極利行
 西田眞三郎 八木柳緑
 浪花町人 大塚克三 畫

五節句遊び

一月の中座

中井浩水

世の中がいぢましく、せちべんになつて来て色里の遊びも算盤づくめ、よろづ浅間にと傾く當節、われら不良老年大いに慨嘆に堪えざるの時、中座の一月、二番目の『椀久』、茨木屋の場ではんなりと長閑な五節句の遊びを見て昔に立返つた心持、所屬の諸優諸君に厚くこの勞を謝して置く。

四人の客が同じ廿九、七難九厄と云つて人がいやがる此年を早く片づけて化舞ふに何か珍趣向はないかと考へると氣の利いた太鼓持が五節句に因んだ藝廻し、終りに節分で西の海へサラリはいかゞ、

ソレ面白からう、各自が藝につまつた節は茨木屋名代の楯で罰盃。

長三郎の分銅屋の金三郎から藝づくし舞臺には酒の香が充ちてゐる、その遊樂の氣分が見物にまで及んでサア此次ぎはどんな藝をやるだらうかと目を見張る、罪がない、他愛がない、暢氣である、又しても哲學澤山、主題屈起の新作を満喫して腹が堅く硬ばつてゐる折柄、かうした愚味は世に有難い珍肴である。その一座に一人酒の悪い男がゐる、それが鴈治郎の椀屋久兵衛、次第に廻る醉、崩れる姿、とろんとすはつた眼でジロ／＼と一



座を睨めまはす、無暗と酒を人にのませたがるこれもよくない男がある。それは箱登羅の柴田定之進である、傍からとめると青筋を立て、叱りつけて迄もしつこく久兵衛に酒を強いる、これもよく大連の酒席にはある形、椀久のやうな酒癖も随分と、藝者仲居泣かせのお客には少くない。

それらの客、それらの藝者、末社、仲居——やがて酒の悪い久兵衛が楯へ入れた小判をザク／＼と握んで節分の豆打ちをやる、貞京版の『椀久一世の物語』に矢張茨木屋で黄金の豆打ちを椀久がやつてゐる圖がある。鴈治郎の椀久は前後不覺の醉からこれをやるが『一世の物語』の椀久はどうやら正氣らしい、或は素面でやつたかも知れない、幕切に目のさめるやうな美しい福助の松山太夫がスウと現はれる、今ならお約束藝者のパリ／＼が遅れ走せにやつて来て

「あんた無茶しなはんな」と一喝をくらはせる圖である。全く面白い、定之進の悪計、茨木屋のおせいに頼

まれた松山の達て引きなどはどうでも好いではないか、私は一幅のこの遊樂圖に魂を吹込んだやうな情景に恍として酔ひ度い、鰻屋の前を通つてオクビを出し、酒藏の横を通つて酔拂ふ類かも知れぬが何れにしても好い心持である。

福助の松山太夫



手に入つてゐる役々だけに俳優達もノウ／＼と氣樂にやつてゐる。此場の鴈治郎の久兵衛は絶品である、福助の松山も國色無双——これは少々おまけだが町内無双ぐらゐなところ——である、箱登羅の定之進も馴れたものである、一月中座の各狂言中、私はこの『椀久』のこの場ほど面白く、心安く、なつかしく見物した

ものはない。下の巻椀屋の寮の場とくると大分に事が面倒になる、しかしこれも一時でやがてはハツピーエンド、映畫なれば久兵衛と松山太夫とが大寫しか何かで顔見合せてニツタリ、これから抱擁、接吻、見物の彌次が口笛を吹くといふ段取り、部屋で會つた時には

「さつぱり物が喰けまへんね」

と消然として注射をして貰つてゐた鴈治郎が櫻の枝をかついで狂ひ廻つてゐるといかに若い、別人のやうだ。蕙女の母親は好い阿母させ振りである、私の亡くなつた母親人も至極の善人だつたが蕙女のやうな阿母さんならもう一度持つても好いなと思ふ。鰻十郎の番頭も大事にすべき白鼠である、私の子供の時、家にゐた番頭は又しても使ひ込んで亡父に叱られてゐた、こんな番頭がゐたら私の財産も殖えてゐたであらうなどと阿呆なことを考へてゐると幕がしまつた。東京の狂言幕に對し新案の五色幕がしまつた、あの幕を見ると幼き頃に私の嫌ひだつた色羊突を思ひ出す。

つたが背景がひねり過ぎ、あとの『卯の花』では長三郎の才藏の衣裳が目に残つた。(畢)

浪花座の印象

京極利行



さて一番目の「關ヶ原」は家康と三成との應酬を描いた場が見たかつたが略されてゐて残念、福助の三成は前は木村長門守、後は關白秀次、我童の淀君は一國女中幕の「大妻寺堤」は何度見ても好きな芝居であるが唯、春藤治郎右衛門、少しの間も工夫に工夫をこらしていろ〜と動きすぎる。尤も長の苦勞神經過敏は當然か、「姫山姥」の八重桐は我童初役の由、當人が氣にしてゐる割に先づ可し、この人笑を含んだりする時、變に口をまげるこれは顔面神經痛、ヒスの女によくある奴、踊りでは「青海波」こしらへは面白か

延若君を中心に、壽三郎、成太郎、巖笑、愛之助、大吉、福太郎、建藏諸君其他を組み合せた關西歌舞伎の別働隊一座晝夜二部制中ともかく問題となつた大狂言は正宗白鳥氏作「勝頼の最後」中村吉藏氏作「小山田庄左衛門」(この二つは問題の新作であるが故に)「大文字屋」鳩の浮巢「この二つは面白く觀られたるものなるが故に」盛綱首實檢(院本物として大物なるが故に)、この五つで、それ〴〵問題となつた理由が三様になるのは割註の如くである。

新作は二つとも壽三郎、成太郎兩君が主演で二人が夫婦の役になつて居る。然

×

×

タリ出あつて居るので、その點では成太郎君は粧はざるに既にその人になるのトクをして居る。

主演者は、壽三郎、成太郎兩君だが、助演者は大吉、建藏、當之助、狂藏、愛之助諸君である。直言すれば、この助演者決つて主演者に幸するの助演振を示して居らない。「小山田庄左衛門」がともかく成功し、勝頼の最後が全然失敗したのは、前者は作その物がある點までは助演者が助演者らしからぬ演出態度に出ても、さまで破綻を舞台上に見せぬでも済むまでに書かれて居る結果であり、後者は助演者には助演者らしからぬ演出態度に出づることを一切許されぬテイの作であり、演出者の指揮のもとに舞台が統一されてこそはじめて作内容が舞台上に生きて出るテイの作だつたからである。そして又他方面から云へば前記の諸君は多くの場合、無意識裡に助演者として助演者らしからぬ演出態度にだけは出得られても、意識してすら助演者として助演者



らしい演出態度には到底出て行かれぬ側の俳優であるから、そうした事實が、「小山田庄左衛門」では成功し、「勝頼の最後」では失敗する、この二様の結果をあきらかに示したことになるのである。

こゝで、壽三郎、成太郎兩君に言ひたいことは、君等二人が主演で、今度の如く新作を上演する場合、助演者を大いに擇び玉へとの事である。なまじ既成俳優でなくともよい、身分の低い連中でもない、演出者の演出態度が理解出来て、その指揮の範圍で作内容を舞台上に活かすべく努力の出来る人達を助演者とした方が

今度の助演者の如くにまさかに主演者兩君の演出を全然にぶつこわしてかゝるやうな演出態度には出なかつたであらうではないか、「助演者を選べ」、この言葉は角座の喜多村君の「小猿七之助」の場合にも注文出来ることなので、その理由も壽成兩君の今度の場合の如くにひどいものでないにしても、ほど相似て居る。

×

延若君の「盛綱」に對しても述べたいことがあるのだが、これは他にゆづつておく、たゞ今月中旬松島八千代座で見た片



岡長太夫君の方に盛綱らしい感傷をより多く持たれたこと、首實檢のクダリで

は其の筋の干渉の結果、延若君でも長太夫君でも首の抜ひ方で心もとないことを

新派劇漫言評語

西田眞三郎

やつて居ることを書いておく。(二二六、一、一)

喜多村の芝居には比較的いゝ脚本が上演される。今の一座が新派劇がどん底へ落ち込んだと初めて気がついて、皆が必死の努力でそのどん底から這ひ上らうと悶掻き出してからといふものは狂言の質がよくなつた。我る劇團の人は其の狂言の作者の地位から原稿料の値踏みをしてそれに最適するほどの脚本料を何故俺とこへも出さないだらうかと憤慨して居るのを私も聞いた程であつた。兎に角美ましがられる位の狂言立てであつた。喜多村の一座はそれだけでも恵まれてゐるわけだ。

脚本の質が向上し、優人の心持が革まつても、見物の方に餘り變化がない。喜

多村や花柳の御最負筋のあたまには全く變りがなく、寧ろ數に於て減つたやうだ狂言の割合に大正末期の興行成績がよくなかつたといふ事も、これがためだと言ひ得るかも知れない。新しい、藝術味にゆたかな脚本を幾度か熱心に上演して來た花柳章太郎などの努力が餘り世間で認められて居ないのは氣の毒な事であるがこれ等優人達の地盤には全然狂言の藝術的價值と相容れないものがあるためらしい。最負筋が俳優を對照としての少數の見物よりも、狂言を對照として雲集する大多數が劇場を埋める日が何時になつたら來ることであらう。藝術に於て酬はれず、興行價值に於ても亦償はれない境遇に在る俳優達は眞に氣の毒千萬である。

喜多村や花柳の態度はかなり眞摯だ。近頃の眞劍さで、新しい脚本の演出が理解されなければ本當に浮べれないかも知れない。ダンスホールが盛況を極め、名も知られなかつた洋酒があらはれる近頃だ。

初春狂言の『小猿七之助』は面白いお芝居であつた。舞臺裝置に於て、その演出に於て近頃珍らしいものであつた。板浪に船を浮べたり、七之助と御守殿お駒との情緒纏綿たる場面に清元「おはん」を聞かせたり、全く嬉しがらせるには充分なものであつた。新派には珍しい芝居だと思つて見た。評判は喜多村のお道楽だと言ふことに歸したやうで私もそれに同感した。七五で唄ふて行くあの時代な臺詞と仕種にかりそめにも新派劇の興廢を問題にする人が動いて居るとは如何しても考へられなかつた。お道楽の評は頗る當を得たものであつた。私自身は特種の演劇は別として、從來の劇に對して、搦物

散髪物、七三、オールバックの差別なく新舊を演劇の頭上に冠したくない。河合が歌舞伎に入つても、梅幸が『不如歸』を演つても、福助や魁車が『父歸る』を出しても、少しもお道楽との感じなしに眞面目に見るやうな廣い自由な劇壇が欲しい。依つて喜多村の『小猿七之助』演出の努力は認めるが、彼が言ふ所の新派興廢期に於ける新派の大旗の下に於て演ぜられた事に就いては、どうしても賛成は出來ない。大詰で忠信に扮してゐた田宮を見るに至つては更にその感を深うしたことであつた。

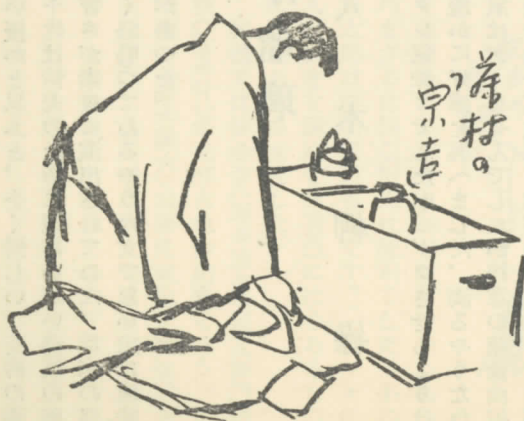


菊地寛氏の『盆栽』は私の觀た時は藤村の男が花柳の女の髪を掴んでナイフを振り上げて居る處で停電したので、すつかりぶつこわされて了つた。幸ひ晝間だったので直ぐ繼續せられたが、藤村の直情的な男がよく出てゐた。女優をしてゐる妻の名が世間で問題にされるほど不安を感じてゐる心持よりも藤村には興奮して女の髪を切るイキがより以上に表現されてゐた。花柳の女優はそのタイプを出してはゐたが、只の夫婦喧嘩の心持位にし



か受取れなかつた。見物にも只の喜劇として受けたやうであつた。

二の替りの『養蠶の家』では花柳の孝太郎は男役としては立派な出來ばえであつた。女形の場合に見るモダンガール式の強さが此の男役に依つて緩和せられ素直な青年が出來上つた。先年『白狐の湯』





の少年もこの意味で成功に近い演出を見たやうだ。人を殺しさうな強い男には見えないが、若しそう見えたら失敗に違ひなかつたらう。母親に殺人のことを告白する時の狂はしい氣持もこの温順な青年であるがために無理が出なかつた。英の繁野は最もその人らしくなつて居た。地震の嫂と共に寫實のいゝ所を把んでゐた。喜多村の母親は一等無難であつた。「城」の雪江などに比して非常に慎重で、いかにも生きた人間が出て居る。『秀千代殺し』の堺屋のお秀にも寫真味と實在性に富んだ人物を巧みに表はしてゐた。

『秀千代殺し』で藤村の宗吉が白く塗つて出てゐるが、あの顔が妙に青くて生氣がなかつた。うぶな一本氣で突き詰めて行く性格は巧まずと其この優にはしつくりはまつてゐる。しかしこれ以上に出な

辨天座の人形淨瑠璃

八木柳緑

燒失した文樂座は人形淨瑠璃とは因縁淺からぬ昔の竹田の芝居、今の辨天座に引越して初春興行の蓋を開けました、狂言は前繪木太功記「大序より尼ヶ崎まで」次「夕霧廓文章」吉田屋、中「攝州合邦辻」合邦住家、切「壽連理の松」生玉より佳吉濱邊までといふ賑やかな献立です。「太功記」では猶且尼ヶ崎(古靱糸清六)が一等面白く聴かれました、着實に一步一步と踏み堅めて行く手法は新作品に對して深く其の敬意を拂はせました、簡潔を貴ぶ結果、總體に早間(悪い意味のマ

クレ氣味)でしたが、ダラさせるよりは遙かに好感を與へました、滴るやうな色氣はありませんでした、が得意の迂餘曲折の妙味で重次郎と初菊の甘いシーンを巧みに展開させてゐました「現はれ出でたる武智光秀」だの「アワヤと見やる表口」などに威壓を感じられなかつたのは遺憾でした、こんなところはそゞろに死んだ越路を憶ひ出させます。物語りは悲愴、段切は立派でした、糸の清六、アノ恐ろしい臂力に一層情味が加はれば、時代物弾として先づ天下無敵でせう。

吉田屋(土佐糸吉兵衛)老境に入つた土佐は艶こそ失せたが、一方深刻な寫實主義の言葉に一生命を拓いたの感がありま

に「聲物」を語らせるのは考へものです。糸吉兵衛、此人の癖として撥を寝かしすぎたので大きい音色が出ません。堂々といふ點は望み得ない三味線です。合邦(津糸道八)難點は足の長かつた事言葉でも地合でも長短緩急、其よろしきを得なかつた事は何としても残念でしたが、アノ熱演振には新しいフワアンは二も二もなく共鳴したかのやうに見受けられ、當興行引括める人氣を背負ひました足の長かつた點ソレは青砥左衛門の條、玉手御前の手負など、「とりく擴げる」から段切までは糸の道八に全責任があるやうです、掛け聲の多い、山氣のある道八の三味線は有聲に嘘を吐く事に妙を得てゐます、紋下の三味線ともなれば「型」其物にも精々吟味を加へて貰ひたいものです。



お夏清十郎湊町(朝糸松太郎)三十年振りて故郷へ錦を飾つた二人です、淡々とした朝の語り振りは餘に呆氣ないやうに思はれます。三十年間本場の大坂と交渉を斷つてゐた老いたる太夫の悲哀を思は

せぬでもありませぬが、おなつやお梅の巧まざる自然の情味は流石でした。糸の松太郎は廣助系の名人です。一撥々々に人物動きを現はせた音色には心あるものに感激を催させました。其他では妙心寺(源糸仙糸)長左衛門切腹(叶糸叶)が先づ古色の出来でせう。夕顔棚(静糸團六)は單に破綻を見せ、生玉(鉸糸新左衛門)は朝太夫松太郎に對するホンの御馳走に過ぎませぬ。人形では榮三の重次郎と伊左衛門が手堅い腕を見せました。鏡助改め二代目桐

竹紋十郎は「吉田屋」の夕霧を遣つて改名披露をしましたが、太夫らしい品位に缺けた事は是非なくして立派な腕の持主です。文五郎はケレンの勝つた藝ですが

玉手御前の前半「納戸」までの情味は無類でした。文三が病氣で光秀も合邦も代り役でしたが、逆もお粗末過ぎます。其他玉松、小兵衛など腕二杯に活躍しました。

語口も、大阪式の油こい語口の中に在るのも、取合せ上好いかも知れない、松太郎のたゞきこんだ腕はほんとうに氣持ちがよい。

辨天座の一幕見から

浪花町人

文樂座が御靈から焼出されて竹田の芝居——辨天座に出開帳した、天井が高かつたり、場内が廣すぎたりして、御靈で味ふべきシツクリとした味はないが、四六時中齟齬としてゐる我々にとつて一幕見の出來たのは何より嬉しい、嬉しいと云ふよりは便利である。古つぼの太十を後半きいて、土佐太夫の吉田屋を聞いた土佐は久し振りで聞いた、土佐の聲は、今では單に美しい許りでない、美しい聲にさびがかゝつて來た、この點で今度の「吉田屋」は土佐としては格好の演物であつた。「吉田屋」をきいてからドンブラを一わたりして、又一幕見の客となつた。

紋下の津太夫の合邦の後半からきいた、玉手御前の手負ひからきいた。何時もわるいと云はれるこの太夫の聲も、この一段の鮮やかな力一杯の語口でさして氣にもならなかつた、道八の叩きすぎる三味線は實際いやなものだ、叩きすぎるのでいやなのは、清元の梅吉とこの道八の三味線だ。紋下の三味線を引く人のすることはではない。東京から新たに招かれた朝太夫と松太郎とは、お夏清十郎の湊町を語つて居た。七十才を越したといふ朝太夫の聲は流石に奇麗だが、語られる人物は皆淡々として一様で、浮ぼりの様にハツキリとしないが、こんな江戸式(?)の

てゐる近代人にとつては嬉しいものゝ一つである、そして、やがて文樂的一幕見はドンブラの名物の一つともなるであらう。



文樂的一幕見、御靈さんから辨天座へ引越興行の副産物かも知れないが、一幕見は何と云つても、忙しい思ひでくらし

戯曲の土産

中井泰孝

人物

宗吉
辰藏
お芳
女中

時現代

所 東北地方の或る温泉場
餘り上等でない宿屋の二階、正面は障子、その奥は廊下、右側床の間、左側襖間
幕開く、暫く舞臺空間、遠く工場の汽笛
(障子の蔭で)

辰藏 もし、宗さんちやねえかね
宗吉 え……
辰藏 宗吉さんだろう？
宗吉 そうです
辰藏 こりア珍しいこつたなア……私辰藏だよ、そら、お前が此の下の工場にゐる時分に、門番をして居

た辰藏だよ

あ、爺つんか

辰藏 あんた此家に泊つてるだかね

宗吉 先刻到着ばかりなんだ、爺つあんは今でも下の工場にゐるのかい？

辰藏 うんにや……そうだ、お前さんが止すと間もなくだつたらう、私止したのは……

宗吉 そうかね、僕の部屋は此處なんだ、まあお入んなさい(障子を開けて入つて來る) 妙な所で會つたもんだね

辰藏 (續いて入る、手拭を下げて居る) 全く思ひがけねえ人に逢つたもんだ

宗吉 さ、火鉢の側へお寄んなさい、東海道方面から見ると、随分此地は寒いね

辰藏 そりやもふ此地は二度も雪が降つたんだからな、(座つて)先づ何時もお變りなくつて……

宗吉 あんたも何時もお達者で……

辰藏 なアに、達者どころぢやないよ宗さん、私も五十

九になたよ、心持はまだそう老若た氣もしねえが

矢張り年だね、體が云ふことをきかねえや

宗吉 でも、ちつとも五年前と變つちや居ないよ

辰藏 なアに大變りさ、見ておくれよ、もう此の通り骨

と皮ばかりさ

宗吉 爺さん家は此の近所だつたかね

辰藏 此地から五里半ばかりあるだ

宗吉 そうだつたかね、ぢや爺つアんも此家へ泊つてゐ

るの？

辰藏 あ、二三日こつち泊つてるんだ、なアにね、私の

末子娘が下の工場へ來てゐるもんだからね

宗吉 そうかね

辰藏 此の節持病の喘息が起きて困つて居るつて云つて

よこしたら、ぢやア泊料は俺が持つから四五日湯

治に來たらどうだつて手紙よこしたで、まあ娘に

面會かたぐやつて來たよ、昨晚も遅く上つて

來て泊つて歸つたよ

宗吉 そりアお楽しみな事だね

辰藏 何かい、お前さんも矢張り……湯治にやつて來な

すつたのかい

宗吉 湯治と云ふんでもないんだがね、實は迎へに來た

んだよ

辰藏 迎へに？

宗吉 お芳の奴をね

辰藏 あアあ、お芳姐か、そうか、好い女子になつてる

ぜ、しつかりした女子だからなア、そうノお前

さんとは大分お安くねえ仲だつたつけなア

宗吉 (二寸横を向いたまゝで) あんな事になつちまつて

周圍から種んな事を云はれるもんだから、どうも

居憎くなつてね、一層お互に暫く別れてゐて働こ

うつてね、まあ何と小店の一つも出せる様にな

つたら迎へに來るつて約束で、彼所を飛び出した

んだつたが……あれが恰度大正十二年の二月だつ

た

辰藏 そうだ、まだ雪のある時分だつたからな、あの日

も慥か散らノ降つてゐたぜ、そうノ思ひ出す

赤い襷をかけて、赤い前垂をしめたお芳姐が、あ

の鐵柵の側に悄然と突立て、雪の降る中に、お前

さんの後姿を何時までも見送つてゐた姿を俺ア覺

えてゐるよ、あの時他の奴等ア岡燒半分で嘲笑つ

てゐやがつたから、何だつて笑うだ、さもあるべ

きこつちやねえかつて、俺ア怒つてやつたつて、

成る程もふ五年になるかなア……

宗吉 あの頃は全く僕達の味方つて者は爺つアん一人だ

つたからな……そうだ、まあ爺つアんにも悦んで

ちまつたよ

辰藏 階段を上つて來る足音

宗吉 來たかな

辰藏 え、

宗吉 二人耳を澄す、女中食膳を持つて入つて來

る

宗吉 あ、御飯か、もふ少し後にしてくれないか、それ

からもふ一つ客膳を用意して置いて貰いたいんだ

女中 畏りました、ぢやもふ少し後に持つて參ります

辰藏 それからな、女子の人が此の方を尋ねて來たら、

直ぐに此室へ上つて貰うだぞ

女中 畏りました。(去る)

辰藏 どちら、私も行つて來やう

宗吉 まあ好いぢやないかね

辰藏 いや、もふ五時半だ、そろノお芳姐が上つて來

る時分だ

宗吉 來ても爺つアん居たつて構はないよ

辰藏 いや、邪魔しちや不可ねえ、俺アこれから床屋へ

行つて髻を剃つて、それから歸りに湯へ入つて來

るだ、恰度話の濟んだ頃に戻つて來るだ、ぢや御

免……

宗吉 ぢや後に是非お出よ、久しぶりで三人で話そうよ

辰藏 ぢや急いで行つて來るよ。(去る)

辰藏 此ア立派なもんだ、如何にか良く似合ふだろうよ

金だね、素曠しいお仕度だな、殊更らしく感服の

表情を示して、お前さんは全く見上げた人だよ、

そうか、俺ア人事でも眞實に嬉しいよ、早く逢つ

て悦しておやりよ

宗吉 先刻使ひをやつて置いたよ

辰藏 全く人間は辛棒が肝心だな、お前さんの方で其の

心掛けなら、お芳姐の方だつて矢張り悪い噂一つ

立てられるずに、あゝして辛棒してゐたから、此

んな好い運が湧いて來たんだ、何でもお芳姐も相

當残してゐるつて話だぜ

宗吉 はつ……彼女が残して居るつたつてしれたもんだ

よ

辰藏 いや、いくら知れたもんでもよ、その心掛が優し

いでねえか、兎に角お前さん達二人の心掛は立派

なもんだ

宗吉 僕は爺つアんに賞められて、すつかり嬉しくなつ

宗吉は一人時々時計を見たり、表の方に耳を傾けたり、立つて行つて障子を開けて階段の方に注意したりする。その間に女中が廊下を通り過ぎるのに氣を配つたりする。廳で安全剪刀と手鏡を出して顔を剃り初める。

階段を上つて来る足音、彼は慌てゝ道具を納う、女中障子を開けて

女中 お客様が見えました。

お芳（極めてじみな風）入る。女中去る

お芳 久潤く……。

宗吉 久潤くだったね。

二人は長い間見合つてゐる、二人の顔には一向何の色も浮んで来ない。

宗吉 まあ火鉢の側へお寄りよ。

お芳 有り難ふ……（少しく膝を進める）

宗吉 ……随分變つたね

お芳（極めて熱のない口吻で）あんたも随分變つてるぢやないの……。

また暫く間。

宗吉 五年ぶりだね。

お芳 まる五年になるわね、今まで何處の方へ行つてゐ

たの？。

宗吉 大阪にも居たし、九州にも少しゐた、それから朝鮮へも行つて来たよ。

お芳 そう、朝鮮から一度手紙を貰つたわね、でもそんなに方々歩いてゐたら、随分面白い事もあつたでせう。

宗吉 商賈で歩くんだもの、ちつとも面白い事なんか無いよ、お前大分残したつてね。

お芳 誰がそんなこと云つたの。そんな事嘘よ。

宗吉 隠さなくつたつて好いぢやないか。

お芳 隠しやしないよ、あんただつて判るぢやないの、

あんな所にゐて残る道理が無いぢやありませんか、あんたこそ大分残つたらしいわね。

宗吉 駄目だね、歩いてゐると雑用にはばかり追はれてね

話途切れる。

宗吉 大分心持も變つてるね。

お芳 そうかしら、自分ではそんなつもりはないけど、

宗吉 そんな風に見える？。

お芳 見える。

お芳 あんただつて變つてるよ、元のやうな心持なんかちつとも無くなつてるわ。

宗吉 お前まだ此れ（拇指を示す）は無いかい。

お芳 無いわ、當分そんな氣持にはなれそうもないわ、

宗吉 あんたはどう？、ちゃんと出来てるんでせう？。無いよ、だから今度お前を迎に来たんだよ、約束通り……。

お芳 あんなうまい事云つてるよ、ホ……。〔氣を變へて〕ね宗さん、もふお互に腹の中の探りつこは止しませうよ、そして何か他の話でもしませうよ、五年ぶりで會つたんだもの……。

宗吉 そうだね、それも好いね……。

女中 女中食膳を持つて入つて来る。

宗吉 もふ宜しう御座いますか。

女中 あ、好いよ、隙どらして済まなかつたね。

お芳 いゝえ……。

お芳（自分の前にも膳を据えられたので）あら、私に

宗吉 うん。

お芳 あら、私済んで来たわ。

宗吉 （不快な色）そうか……。

お芳 待つてゐてくれたの。

宗吉 先刻使ひに行つた人云はなかつた？。御飯食べないで来るやうにつて……。

お芳 え、それは云つたけどね、恰度出やうと思つてゐると御飯の報せか来たもんだからね……済まなかつたわね。

宗吉 そうか、ぢや仕方がない、（女中に）済まないが其れを何とか出来ないかね。

女中 いゝえ大事御座いませぬ、まだ他に食らないお客様が澤山入らつしやいますから。

宗吉 そうか、ぢや済まないが、そうしておくれよ。

女中 畏りました。

お芳 眞實に済みませぬね。

女中 いゝえ大事ございませぬ。

宗吉 では一人で食べやう（女中に）君、宜いよ、僕が

盛けて食べるから。

女中 左様で御座いますか。

お芳 眞實に宜ござんすわ、私がつけるから。

女中 ぢや済みませぬ、お願いいたします（膳を持つて去る）。

お芳 久しぶりでお給仕ませうよ。

宗吉 そうだね、一つ頼もふか。

お芳 櫛を押しやる。

宗吉 （お芳の腕を見て）時計を買つたね、

お芳 今年の春ね、お繁さんとお揃ひに買つたの。

宗吉 良さそうなんだね。

お芳 良かないわ、此處にも同じやうな時計があるぢや

ないの（シヨールの上に置いてある腕時計を取り上げて）随分好いのね、私のなど、比べ物になら

ないわ、あなたの？。

宗吉 いや。

お芳 女持ちだわね。

宗吉 うん。

お芳 誰んの？。

宗吉 それはね、何なんだ、妹の土産にやろうと思つてね……。

お芳 そう……もう妹さんは幾つ。

宗吉 たしか十九か二十と思つてゐるんだ。

お芳 此のシヨールも？。

宗吉 ……あ……。

お芳 好い色合ひね（取り上げて）私も最も一度此んなのを掛けて歩ける年になつて見たいわ、私一寸掛けて見ませうか（肩にかけて）如何？、随分變ぢやない？。

宗吉 （つく／＼見て）全く變だね。

お芳 私も一度は此んなのを掛けて歩いた時もあったんだけれど……、今私がかんなのを掛けて歩いたら人が見て何て云ふだろう、屹度色氣違だつて云ふかも知れないわね（宗吉の飯の無くなつたのを見て慌て）あら御免なさい、さ、どうぞ……。

宗吉 もふ止そう。

お芳 それつばかりでいゝの？。

宗吉 うん……。

二人の話は稍ともすると白みかける、宗吉は茶碗を膳に置いて、凝と見入つたその姿勢で。

宗吉 あの時、お前儘か十九だつたね。

お芳 え……。

宗吉 お前あの頃の事を思ひ出す事があるかい。

お芳 そりやあるわ。

宗吉 そしてどんな氣持がするい？。

お芳 まるで夢の様だつて氣持だわ、あんた其んな氣しない。

宗吉 まあそんなもんだね。

お芳 （じつと火鉢の中を見詰めて）あの頃は宗さんだつて若かつたね。

宗吉 二十一だつた。

お芳 お互にまだ何も知らない眞實の子供だつたのね。

お芳 間、雪障子を打つ音。

お芳 （氣が附いて食膳を障子際の方へ運ぶ）

宗吉 そうして置いても宜いよ、女中が来て整理るから

お芳は少し離れた所に浮腰に座つて、自分の腕時計を見てゐる。

宗吉 什麼したの？。

お芳 ね宗さん。

宗吉 あ……。

お芳 あんた何日頃まで泊つて居られるの。

宗吉 さア……。

お芳 でも四五日は居るでせう？。

宗吉 そうだなア僕の事だから、思ひ出したら今晚にも出發かも知れないんだ。

お芳 そんなこと云はないで緩り泊つてお出よ、明日は何とか課長さんに話して、一日休んで來やうと思ふんだから、何か御馳走買つて來るわよ、ね、そうなさいよ。

宗吉 うむ……まあ考へて見やうよ、今夜何か用があるの？。

お芳 眞實に困るわ。

宗吉 どうしたの？。

お芳 ね、今晚九時から課長さんの訓話がある晩なのよあんたも知つてる通り其れに出ないと罰金でせう馬鹿々々しいんだもの、だから其れまでに必ず歸つて來るつて云つて來ちまつたの……困つたわねもふ八時だわ。

宗吉 そうか、それだつたら早く云つて呉れるといゝのに、別に此方には大した話がある譯ぢやないんだから、ぢや直ぐお歸へりよ。

お芳 でもね……。

宗吉 なアに構うもんか、また會はふと思へば何時でも會へるんだもの。

お芳 でも濟まないわね。

宗吉 そんな遠慮はいらないよ。

お芳 ぢや眞實に濟みませんが、今夜は歸へらして貰うわね。

宗吉 あ、眞實に飛んだ迷惑かけちまつたね。

お芳 迷惑でなんかちつとも無いんだけど、恰度悪い日に出會したんだものね。

宗吉 遅れると不可ないから早くお歸りよ。

お芳 ぢや御免なさいね。

宗吉 明日も休んだりして來てくれちや困るよ。

お芳 え、都合よく行つたら晝の中に来るわ、ぢや御免なさい。

宗吉 左様なら。

お芳 行きかける。

宗吉 （お芳の方を見ないで）ね、芳さん

お芳 え。（ふり返へる）

宗吉 （同じ姿勢で）掩達の仲も最う此れだけかね。

お芳 五年も會はないでゐるうちにお互の心持がすつかり變になつちまつたのね。

宗吉 人間なんて誰でも此んなものかな。

お芳 でもよく考へて見れば五年間と云ふ長い間、私達

は一日々々と年をとつて来たんだものね、氣持だつて顔だつて、いつもあの頃と同じでは居ない筈だわ、恠ふしてお互が會つて見やうつて心持が残つて居ただけでも不思議な位だわ。

宗吉 眞實にそうだった、僕は今日の前にお前を見て居ながら、矢張りあの赤い前垂をしめて髪を桃割に結つた芳さんが、今に此處へ入つて来るのを待つて居るんだ。

お芳 だから其のショールだつて、眞實は私に買つて来たんでせう。

宗吉 うん、そうだよ。

問

お芳 矢張り私達は長い間別れて居たのが悪るかつたんだわね。

問 障子を打つ雪の音。

工場の汽笛。

お芳 (驚いて)アツ、九時だ、ちや私歸へるわ。

宗吉 飛んだ足止めしてしまつたね。

お芳 明日は屹度來ますわ。

宗吉 あ。

お芳 ちや左様なら。

宗吉 左様なら。

お芳障子の外へ出る。

お芳と辰藏廊下で出會ふ。(蔭の聲)

辰藏 おや、お芳さん、もふ歸へるのかい。

お芳 今晩相憎くと課長さんの訓話のある晩なの。

辰藏 そいつア相憎くだな、だけど訓話位え休んだつて構はねえでねえか。

お芳 だつて五十錢でも出すのが不満らないわ、明日ゆ

つくり來ますわ。

辰藏 そうかね、ちや明日は成る可く早く上つてお出よ

お芳 え、左様なら。

辰藏 左様なら。

辰藏 辰藏障子を開けただけで。

辰藏 (顔だけ出して)只今。

宗吉 お歸へり。

辰藏 お芳さんは相憎くだつたね。

宗吉 まだ明日緩り來るつて云つて居たよ、まあお入り

辰藏 有り難ふ。(室内に入る)

宗吉 ね爺つア、土産のハネ物上げる様で悪いが、

之れ娘さんにやつて下さいな。

シヨールを出す。

辰藏 え、どうしたんだね。

宗吉 お芳には餘り若向き過ぎて、掛けられないつて云

ふんだよ。

辰藏 そうか、そう云いやア俺も先刻見せて貰つた時に

こいつアお芳姐には少し若向きだな、と思つたよでも實際に此れ貰つても宜いかね。

宗吉 お粗末なもんだがね。

辰藏 お粗末どころか、此土地あたりちや見る事も出來

ねえ品だよ、ちや遠慮なく頂戴するぜ。宗吉さん。

宗吉 どうぞ。

女中膳を持つて廊下を通る。

女中 (開け放してあるので覗く様に)お仕度が出來ましたよ。

辰藏 有り難ふ、室へ持つて行つておくれ、ちや宗吉さん

私御飯食べて直ぐ來るよ、一寸御免。

宗吉 御ゆつくり……。

辰藏 (障子の方へ歩みながら)今夜來たら嬉ぶだろう。

有り難え……。

辰藏去る、宗吉淋しく考へて居る、障子を

うつ雪の音女中廊下を通る、宗吉不圖氣附

いて。

宗吉 あ、一寸姐さん。

女中 へ。(障子を細く開けて顔を出す)

宗吉 僕四五日厄介になる心組だつたがね、都合で明日

の朝一番で出發ことにするからね、今夜のうちに

會計して置いておくれよ。

女中 畏りました。(去る)

◇寄贈雑誌◇

- 歌舞伎研究(第八輯) 歌舞伎出版部
- 人生創造(新春號) 石丸梧平氏
- 劇 (一月號) 豊岡佐一郎氏
- 人と藝術(一月號) 津村京村氏
- 歌舞伎(一月號) 歌舞伎出版部
- 辻馬車(一月號) 大阪波屋書店
- 松竹座グラフィック(同) 松竹座編輯部
- 舞臺評論(一月號) 大阪演劇聯盟

宗吉身のまわりの物をトランクに入れ初める。
雪の音頻り。 (幕)

喫煙室

蓼雨

去歲、十二月三十日までは、各戸劇場、黒幕鯨幕を引廻はし表の點燈も消えて、さしもの道頓堀もすつかり闇の巷に化して居たが、藤朝あけの大晦日は朝から黒幕を除けて美しい繪看板を上げ、五色の幟旗を役者の定紋ついた小旗は空に舞りてきのふにかはる美觀を呈し、注連飾と門松これに付きもの、酔漢の姿こそ見えぬ、除夜の鐘を聞く頃から人足次第に繁く文字通りの不夜城となつた。

斯くて昭和第一の春は迎えられ、五座、否、六座とも闇の悲しみの裡に蓋をあけ三日間とも好晴な小春日和に恵まれて各座とも各等賣切の盛況。

松竹座「蹴球王」のルイブガステート側の策謀を憤つて自働車を駆ると、諒闇の喪章つけて靜肅を装うて居る若き男女も思はず釣り込まれて血を湧かし、智識階級の人も腰を浮かして拍手喝采に息づまるばかり。

浪花座の大歌舞伎、賣切満員、御定連は朝早弓の子別れ、由良之助の城渡し等の涙ぐまされて居る場合に、俳優自宅の電話番號や、血壓のメートルで呼ばれては、眼の淵へハンカチフを當て、居る觀客も、思はず失笑を禁じ得ず緊張を缺ぐこゝなる。

教養ある人は「斯道の典型」技神に入る、「地球上の泰斗」等、それらしい聲をかける、併しそれも場合による、壺坂のサワリ、松玉丸の首實檢の場合に「呼鳴、感慨無量」と叫ぶ理の當然に相違ないが、如何に敬賞の言葉でも一般觀客の耳へは異様に響いて満場哄笑の種となる。

御婦人もチヨイ／＼聲をかける、金切聲で眞役者の名を呼んで、眞ッ赤になつた顔をお召の三枚重ねの袴へ埋め、素知らぬ顔で聲を轉嫁する人、エライおめかしの美人が思はず拍手したもの、今更に體裁悪く化粧刷毛で手軽く鼻を叩いて胡蝶化したり、中に狹窄いのは伴れの子供をして叫ばしめれば恰を轉じて恰も制止の形に出る婦人もある。

くからスタコラと詰かけて我れ勝に向ふへ巨砲を据え、〇〇家ッ、△△家ッ、と劇場も張り裂くばかりの動搖めき。

中座の大歌舞伎、吉例の二日が初日、年内からの場取に立錐の餘地なく、まだ幕の明かぬ先から〇〇家ッ、△△家ッ、と崩る、様な鯨波の聲勇しく。

角座の新派大合同劇、晝夜建て別の際、群集が押かけて表のテケツを仆す、太左衛門橋南詰派出所の警官、濫面作つて聲を濁らし制止に汗を流す。

朝日座も朝早くからフアンが詰めかけて呼び物の「亂闘の巷」で龍卷の寅松がお柳に仇討をさせると熱狂に耳も聳むばかり。

辨天座の文樂引越の人形淨瑠璃、ギツンリ詰つて空席なく、知らぬ同志も打解けて膝を交へ、太夫と手摺の品評めに餘念なく「おもはゆげなる玉手御前」のサワリに懨者の咽喉はごつくり鳴り「お師匠はん／＼」「こたへまッせ」と他に見られぬ當座獨特の叫び聲

新派、人形淨瑠璃の場合に別として、歌舞伎

ものである。

大向ふには俳優よりは、寧ろ觀客が觀客を笑はさう爲めの頓狂な彌次を飛ばす人もある。俳優の似聲で揶揄する人がある、舞臺で坊主が斬られてコロ／＼と轉ぶと間髪を入れず「金柑安賣ッ」と叫ぶ、舞臺の死骸の足が動いた刹那「〇〇はん足を蚤が咬みますか」なんかは随分人を喰つた彌次。

お輕のサワリの最中に「わて、何んで〇〇はんを此處に好きだすやる」さか、或る老僮に向つて、「〇〇はん、久し振に赤い、ベッ着せてもらうて嬉しおますやる」なんかは一寸困る。

偶ま俳優の妻が觀劇して居る、其夫たる俳優は舞臺で一生懸命に眼を剝いて居る際「〇〇はん奥さんが棧敷で觀てはりまつせ」さ甲が叫ぶ、乙が其尻馬に乗つて「お二人りとも嬉しおますやる」と掛合に叫ぶ、満場ごつこ笑ひ叫んだ三階と棧敷の三へ視線を向け肝腎

芝居に掛け聲は勇ましく斯ほど景氣づかしのものはない、片唾を呑むで觀てもらつて幕が閉まつての屑息こそ本當の感賞に相違ないが「猪討めしと勘平が」の淨瑠璃につれて「〇〇家ッ」と騒がれるのは勘平に扮する俳優にこつて無上の光榮であり斯くてこそ力も入る、さもなくて、花道の出、乗切の科白、爰さいふ正念場に聲を響めて見物せられては甚だ寂寥を感じ寔に張り合のないもので自ら興が湧かぬ、爰が山さいふ乗切の際に崩れる様な感激の聲、それは金では買はれぬ貴い聲である。

近來見物の聲も大分變はつて來た、〇〇家ばかり、待つて居ました、巧いッ、其處々々、腹々、さいふやうなのは次第に妙くなつて來て、〇〇家ッ、御大、司令長官、大統領世界一、古今無比、さいふ風に叫ぶやうになつた。

〇〇町ッ、さ當の俳優が棲む町名を呼び、藝名ぬきの本性本名を呼び、中には、電話南の百十一番ッ、と呼ぶ人、殊に念の入つたのはちや／＼と新聞記事を携え來て、故人荒太郎の重次郎が納籠口から出るさ、「血壓百八十度ッ」と叫んだ人があつた。

の舞臺へは尻向け、斯うなつては一生懸命觀劇に熱中して居る人は承知しない「靜まれッ」「人氣ちや勘忍しや」「黙れ平民ッ」と頭から湯氣を立て、互に卑しい言葉を交換、臨檢の警官も髪め顔で睨みつけ折角の正念場も騒然として滅茶苦茶「双方黙れ」の仲裁的罵倒で辛度其場を收拾する事も、これは初日に多く平素は滅多に無い。

元より眞負から出る景氣づけであるから一さつのお愛嬌として誰も眞に怒る人は無い、が折角張り詰めた舞臺に緊張を缺いてはコレ所謂眞の引介しの結果となり褒められた俳優もまた迷惑であらう。

大向ふは見巧者である、劇通家は大向ふに多い、芝居にこつて大向ふの叫び聲ほど有難く勇ましいものはない、劇場が破れる程叫んでほしい。

されどそれも時と場合、其場を壊すやうな頓狂な彌次は何んさかならぬものか。

松竹各座如月興行一覽表

中座

□二月初一日
 □毎日午後二時開幕
 東西合同大歌舞伎
 右田寅彦氏作
 一番目 紀國文左大舞舞 三幕
 當選狂言
 中幕 一谷漱軍記
 須磨の浦の場
 淨瑠璃 薪荷雪間の市川
 常盤津連中
 松尾太夫、文字兵衛出演
 玩辭樓十二曲の内
 二番目 時雨の炬燵
 紙屋内の場

大喜利大津繪

竹本連中
 常盤津連中
 長唄連中
 鷹治郎○福助、右團治、長三郎、政治郎
 成笑、市郎、敏夫、魁車、章景、鯉十郎、
 卯十郎、齋五郎、箱登羅、卯三郎、市藏○
 中車(當初春二の替興行)扇雀、大吉、當
 之助、連舍、源平改メ調升、高助、宗十郎
 □特等八圓、一等七圓五十錢、(落物卅五
 錢)二等三圓、三等二圓二十錢、四等一圓
 五十錢、五等八十錢

角座

□二月初一日
 八千代座專屬長太夫一座出演
 □狂言未定

浪花座

□二月初一日(十五日間限)
 □毎夕四時(初日三時)開演
 澤田正二郎一座
 新國劇お目見得
 トルストイ原作
 島村抱月脚色
 第一 復活 三場
 額田六福作
 「舞臺評論」所載
 第二 相馬大作 六幕
 □特等三圓八十錢、一等三圓五十錢、二等
 二圓、三等一圓五十錢、四等一圓

辨天座

□二月初一日
 □毎日正午開場
 文樂人形淨瑠璃
 前 伽羅先代萩 大座より
御殿まで
 中 平假名盛衰記
 笹引の段
 逆櫓の段
 切 壇浦兜軍記 原貫の段
 □特等三圓七十錢、一等三圓五十錢(特一
 落物卅錢)二等一圓八十錢、三等一圓三十
 錢、四等八十錢、五等五十錢

樂天地

□二月二十八日

大新派劇四の替
 陸軍中將摺澤靜夫閣下原作
 小島孤舟氏脚色
 第一 谷村計介 七場
 原隆氏作
 第二 魔船 一幕
 都築、松浪、藤山、大山、荒尾、坪内、
 高濱△木村△都、中村、水木、御門、藤岡
 野澤△木下△大井△福井△東愛子

松八千代座

□二月初一日
 □毎日晝夜二部興行
 晝の部(正午開演)
 第一 三日太平記 二幕
 大森痴雪氏作
 第二 松平長七郎 一幕

竹柴其水氏作

第三 三人片輪 常盤津連中
長唄連中
 第四 新版歌衆文
 野崎村の場
 夜の部(五時半開幕)
 第一 奥州安達原
 御殿の場
 第二 有馬猫 四幕
 我童□愛之助△狂藏、福太郎、延太郎、
 我久之助、吉滿壽、右田三郎、八百藏、ひ
 しまし△吉三郎△義直、たけな、莚平、卯三
 岐、松壽、關三郎、蓮藏△橘三郎△荒五郎
 □巖笑(當如月興行)長三郎□電仙△莚女
 □雀右衛門
 □特等三圓、一等二圓二十錢、二等一圓四
 十錢、椅子席八十錢



編輯後記

姥谷生

先月は編輯後記を書かなかつたので、今月
ごあはせて、言ひたいこと、言はなければなら
ないことを書かせて頂きます。

「中座」といふ餘りに狭い題名から、こんど
は五座も含む餘りに廣い「芝居の區廓」を代表
する「道頓堀」となつたので、その内容や範
圍も擴張されて、編輯が大變にむつかしくな
りました。

今月も初春號と同じやうに「中座」をまじし
て編輯しました。およそ限られた頁數に、五
座を等分することは却つて散漫な記事ばかり
で、雑駁なものになりほしなうだらうかと思
慮されました。

各座のいづれもの上演狂言が、大抵の場合

は月の二十日過ぎてないご決定をみませんの
で、私たちの仕事の上に非常な支障を來すこ
は度々あります。特に歌舞伎などは俳優本位
の狂言の立方で、その俳優一人の事故のため
に、出し物が初日前に變ることは珍らしくは
ありません。おそらく一週間程の旬日で雑誌
の發行をせなければならぬのです。勿論私
の怠慢もありませうが、編輯の充分でないこ
ころはお詫び申上げて置きます。

先月號の誌上で成瀬先生の御希望といふよ
り御忠言のあつたやうに、二三篇の研究的な
重味のある記事を連載すべし企劃して、豫告
にあるやうな特別記事を御依頼してあつたの
ですが、大西利夫氏は東京事務所の方に頼ん
であつた研究資料を送つて來るのが遅延した
爲め駄目となり、大毎の石割松太郎氏はこん
ご當地から發刊されてある「浪速叢書」の御關
係から御多忙であつて、兩氏ともに來月から
御執筆下さるこゝになつてゐます。
後世にのこる名優の手記をと思ひまして、
本社の日比繁二氏に、「中村鷹治郎丈」の「團
菊藝談」を切にお希ひしてありますから、そ
の中に誌上を飾つて下さるこゝも、楽しみにし
てゐます。

昭和二年二月一日發行

月刊 『道頓堀』 第二月號 第六輯

□ 誌代は前金お拂ひに願ひます。
□ 郵券代は一割増にて御註文を願ひ
ます。

定價・金參拾錢

昭和二年一月三十日印刷
昭和二年二月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹合名社

編輯者 姥谷生
發行所 成山桂三
大阪市南區鶴谷仲之町三九
印刷者 岡本省三
大阪市南區鶴谷仲之町三九
印刷所 中村盛文堂

發行所 松竹合名社
電報 六一二四番
電話 六六五番

株式會社 大 林 組

- | | |
|-----------|----------------------------|
| 本 店 | 大阪市東區京橋三丁目七十五番地 |
| 東 京 支 店 | 東京市麴町區永樂町二丁目一番地 (三菱仲廿八號館) |
| 横 濱 支 店 | 横濱市太田町二丁目四十番地 (十五ビルディング) |
| 名古屋支店 | 名古屋市中區新柳町六丁目二番地 (住友ビルディング) |
| 小 倉 支 店 | 小倉市米町二丁目三十二番地 |
| 京 都 出 張 所 | 京都市上京區堺町通御池下丸木材木町六七五番地 |
| 龍 山 出 張 所 | 京城府龍山漢江通八番地 |
| 工作所大阪工場 | 大阪市港區千島町六番地 |
| 工作所東京工場 | 東京市深川區鹽崎町一號埋立地 |

若く明るい顔になる

レイト白粉



平尾賛平商店

東京...大阪

mn

昭和二年一月三十日印刷
昭和二年二月一日發行

金參拾錢 (郵錢稅)